



9784990409623



1920470010004

ISBN978-4-9904096-2-3
C0470 ¥1000E

定価：本体1000円+税

発行：特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
編集：特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
植田裕子、上田假奈代
ノート筆記・写真：上田假奈代、植田裕子、遠藤智昭、沖田都、小手川望、山口瞭子、大崎千晴、大瀧千輝、写真講座受講生
デザイン：株式会社リッシ 神波豪
発行日：2014年3月31日

釜ヶ崎芸術大学 2013
主催：特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）
協力：NPO 法人釜ヶ崎支援機構、大阪市立大学都市研究プラザ、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）、
喜望の家、太子会館老人憩の家、西成市民館
助成：公益財団法人福武財団、LUSH チャリティバンク、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム
後援：朝日新聞社【写真の授業】

クラウドファンディング
釜ヶ崎芸術大学 2014 開校と横浜トリエンナーレ参加のための資金 300 万円を、2014 年 8 月末日まで集めています
<https://motion-gallery.net/projects/cocoroom>

ココルームでは活動のための寄付をつっています
●銀行口座 / 三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通 1585265
特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋
●郵便振替 / 記号 01090-5-48059 ココルーム



釜ヶ崎芸術大学



釜大に寄せて

大学があるんなら

巨大学もあっていい

反対に微小学もあっていい

微笑学や哄笑学や誇大学や無題学や兄弟学や

甘鯛学も縁台学もあっていいなら

世間はどこへ行ってもダイガクだらけ

でもこんなアホな語呂合わせから

世間へ世界へ宇宙へと打って出るのは

ここ釜大だけ

名前に恥じず大きな釜で

色んな問題ぐつぐつ煮詰めて

たっぷり美味しい出しが取れるはず

知識も知恵も歌も絵も笑いも涙もごちゃまぜの
釜大汁を召し上がれ！

谷川俊太郎

目次

- 001 釜ヶ崎芸術大学、ふたたび開校 / 上田假奈代・植田裕子
- 004～ 釜芸日誌
- 030 釜ヶ崎狂言会 / 神田都
- 040 成果発表会
- 042 コラム：何度でも悩んで間違えて、何度でも青春できる / 茂木秀之
- 048～ 釜芸文集
- 049 我以外皆我師也 / 坂下範征
- 050 釜ヶ崎芸術大学へ行く / 横田和子
- 051 釜ヶ崎芸大における世士、私としての感想 / 世士
- 052 釜芸 2 年目、笑って熱烈開講中 / 黒沢雅善
- 054 ガムラン授業を終えて / 中川真
- 055 釜ヶ崎では天文学もアートになる / 尾久土正己
- 056 表現の時間に / 岩橋由莉
- 057 自己表現の喜び / 今滝憲雄
- 058 学ぼうという姿勢 / 西川勝
- 釜芸をめぐる人生の編み目 / 上田假奈代・植田裕子
- 059 マジでまじめなおっちゃんたち / 由良栄久
- 060 芸術の良心、未知の芸術 / 森村泰昌インタビューより抜粋
- 061 釜ヶ崎芸術大学への道～ヨコハマトリエンナーレ 2014 へ / 上田假奈代
- 063 開催概要
- 064 講師プロフィール
- 065 掲載記事



● 釜ヶ崎芸術大学とは

釜ヶ崎芸術大学（以下釜芸）とは何か。まず、大阪市西成区の釜ヶ崎と呼ばれる地域のさまざまな会場で、年間 40～60 のさまざまな講座を開いていること、そして誰でも無料、または望む金額で参加可能であることを伝えることになる。ただこれだけでは、専門家を招き講座を開いている教室と捉えられるかもしれない。この街と企画の背景、活動のなかで起きていること、その本旨を語ることは本当に難しい。正確には「釜ヶ崎芸術大学」というのは、当法人のこれまでの名づけ難い活動の一部に、思いきって名前をつけただけのものだからだ。

● 釜ヶ崎という街

釜ヶ崎は地図にはない。大阪市西成区のなかにある、日本最大の日雇い労働者の街として知られる地域をさす。大阪駅から環状線で 17 分の新今宮駅を出てすぐの地域。行政が定めた「あいりん」という名で呼ばれることもある。広さは 620 ㎡。日本の高度経済成長を支えるため、全国から若い労働力が集められた。狭い地域の中で

きるだけ多くの労働者が暮らせるように、三畳一間のドヤが立ち並ぶ。建物や道路や橋やダムや発電所や…、私たちの暮らしの基礎をつくってきた人の多くがこの街に集められた。けれど暮らしと労働環境は改善されず、人間としての権利獲得のために起こる暴動が、さらなる差別の目を生んできた。

現在の釜ヶ崎を歩くと、すれ違う人の 9 割が、単身男性高齢者だ。日雇いの仕事では安定した暮らしが難しいため家族を持つことが難しく、労働者たちは単身のまま年を重ねる。そして、障がい者や刑期を終えた人たちなど、日雇いの経験を持たない、他の地域からは弾き出されてしまったという人たちも多い。出身地を聞くと全国の地名があがる。地域を語られる時のキーワードとしては、野宿・生活保護・貧困・依存・介護・高齢化などが並ぶ。けれどこの街には、生き抜くための知恵や運動、当たり前ではなかった人生を生きてきた人たちの存在がある。

● ココルームがやってきたこと

釜芸を運営する NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）は現在、釜ヶ崎地域の端っこの商店街

で、（事務所も兼ねた）カフェとメディアセンターをほぼ年中無休で運営している。句会やおしゃべり会など小さな企画が毎日のように開催される。（一日に何本もの企画が行なわれることもある）。ココルームの設立は 2003 年、法人化は 2004 年。詩人であり当法人代表の上田假奈代が、大阪市から新世界にあったビルの一室の運営を任されたことがきっかけだ。賃料と光熱費は行政負担だったことから、公共性について考えこんだと言う。そして「アートに慣れ親しんだ人だけでなく、できるだけ様々な人に場を使ってもらおうこと」が大きなミッションになった。また「表現と自律と仕事と社会」をテーマに置き、カフェを窓口にそのとき舞い込んで来た問題や、浮かび上がった問いをそのまま企画に反映させることを大切にしてきた。そうして、アートを「アート」の世界だけに閉じ込めることなく、社会と、つまりわたしたちの人生や暮らしとの関係を問い続けながら歩んできた。2008 年に大阪市の事業終了後、拠点を釜ヶ崎に移しても喫茶店のふりをして場を開いた。人々の話に耳を澄ます。自分のなかの他者を動かす。企画を考える上での根本的な姿勢は変わっていない。

釜ヶ崎芸術大学、ふたたび開校



● 表現のその手前

当法人はアートNPOとして活動をしているが、絵や音楽などの作品やアーティストによって作られたものばかりをアートとは捉えていない。自分の気持ちを表に出し、相手に伝えること。自らその声を聞くこと。誰かに受けとめてもらうこと。そんな往還のある「表現」をみつめてきた。コクルームは活動を重ねるなかで、さまざまなしんどさのもとに声を奪われた経験を持つ人が多いことを知った。わかりやすいしんどさばかりではない。誰もが人に話を聞いてもらうことで少し楽になった経験を持つだろう。「たすけて」と言うにもまず声が必要だ。けれど一音目の声を出すには、その声が否定されず受けとめられる場が必要だ。だからコクルームでは安全に声を発することができるような、表現をささえる、表現の手前の場づくりを大切にしてきた。

スタッフは自らを開いていく練習を積み、自分のしんどさを認め、言いにくいことであってもそれを言えるようになる場をつくることを、何度も失敗しながら繰り返す。まさに表現の手前を耕す練習を積んでいる。

● 釜ヶ崎芸術大学開校のきっかけ

あらためて「釜ヶ崎芸術大学」という企画を立てたのは、地域内外ともに、これまでよりもっと多くの人と表現と表現の手前の場を共有したかったからだ。まず生活の

リズムがつくれるように日数を増やしたり、会場を釜ヶ崎の中心の各施設に設定した。そして、様々な人に来てもらうには「ワークショップ」という言葉では届かず、もっと分かりやすい名前をつける必要があった。そんなとき、この街において「大学」という言葉が持つ力に注目した。「大学」には権威的な響きもある。枠には収まらない学びの種がある釜ヶ崎で、あえてこの言葉をつけることに躊躇もあった。それでも、日々出会うおじさんたちから学びに対するなみなみならぬ熱意を感じていた。熱がじんと伝わってきて「釜ヶ崎芸術大学」という名前で企画を進めることを決意した。そして、この街の人々といっしょなら既存の大学を越えて本来あるべき学び合いの場をつくれると確信していた。

● 対象：どなたでも

釜芸のちらしの対象に「どなたも」とあえて書いたのは、本当に誰でも、と伝えたかったからだ。子どもも大人もお年寄りも、仕事を持っていないでも、生活保護受給者も、野宿をしている方も、精神や身体に障害を持っている方も、元受刑者も、暴言を吐く人も、どんなあなたも、である。しかし、主催側の思いはそうであっても「自分には行けない場所」と思われてしまうことは多くある。でも、いつか出会えたらと思う。来てくださった方に対してわたしたちから「ご遠慮ください」と言うこ

とはしない。もし、これでは一緒に授業を続けられないと感じた時には、関係ができるのを待ち話を聞く。なんでもかんでも受け入れるわけではなく、こちらもしっかりと話す。言い合いになったり、感情的になってしまっとうまくいかないこともある。去る人のことは追いかけない。けれどなるべくそうして、出会いなおせる関係をつくってゆくことを大切にしてきた。

● 釜ヶ崎の力

釜ヶ崎の話に少し戻るが、この街そのものが他の地域から弾き出された人々をずっと受け入れてきた街だといえる。他の街では敬遠されてしまうような行動をする人が、この街では「ああいう人もいるね」と受け入れられる。一筋縄ではない人生を生きてきた人はちょっとやさつとのことでは驚かない。「自分にいろんな事情があるように、相手にもきっと事情があるのだろう」とおもんばれる人が多い。そして釜芸では、参加者同士がお互いに誰なのか知らないうちに授業がはじまり、そのまま終わることもある。何者なのか知らなくても共に時間をすごす、そのことにこの街の人はよく慣れていて、その距離感は絶妙だ。相手の肩書きなどではなく、その居ずまいや言葉そのものから相手をとらえる力があり、そのあざやかさにハッとさせられる。

● 励まされているのは誰か、自分の人生は自分で

釜芸は釜ヶ崎のおじさんたちを励ますプロジェクトだと勘違いされることが多いが、実はそうではない。まったく違って違う。おじさんたちの語りに、地域外からの参加者が励まされ、なみだぐんでいる場面によく遭遇する。おじさんたちだけではこうはならず、その語りは新しい人との出会いに支えられている。誰かが誰かを一方的に励ますプロジェクトではなく、固定化された関係をほぐし、循環していく。わたしたち自身もその渦のなかにいる。そして「コミュニケーションが上手になるように」とか「みんな一丸となって何かをやりとげよう」ということでもない。気をつけていても、上手にコミュニケートできる人が無意識に相手を「自分側」にとりこもうとすることはよく起きてしまう。これにはいつも自覚的でいたいと思っている。助成金であれば、その報告に成果が求められ、またわたしたちも活動の評価について考えざるを得ないことがある。しかしひとつの評価軸を持って「マイナスからプラスへ引き上げる」ということを目標にしているわけではない。ここで、それぞれが自分の人生を「いろんなことがあるけど、すべてひっくるめて私の人生だ」と捉えられるようになるための練習を重ねているだけなのだ。

● そして、できてくるものがまた、おもしろい

釜芸は取り組みばかりではない。その中で語られること、発せられる声、描かれる線の感じがまた、おもしろいのだ。人生がぎゅっと凝縮され、何かが詰まっている。この街から見えてくる世の中、それに呼応するように作品も自由自在だ。もちろん、釜芸のすべての表現が圧倒的な力を持っているわけではない。けれど、その場に立ち合っているとき、心がふるえ、胸があつくることがある。ここには共有した時間や体温がある。それを物語とよぶのかもしれない。しかしその物語は関わりのない人には想像されることは少ない。釜芸では、そうした物語が編み目のように編み込まれる。応答の往復に気がついた人から注意深く編み目を編みこんでゆく。そうして出来上がってゆく作品、むかえる発表の日、一般的には目を背けられてしまうことも、アートの文脈では不正解とされてしまうことも、他者に誠実に差し出されるそのときに、物語の厚みは存在の厚みに重なり、どこにもない魅力となって現れる。

● 学ばれていることは何か

カフェに入ってきた方や釜芸のちらしをみた方から「これは何や。アートなのか、福祉なのか、何なのか」と聞かれることもある。その返答は、相手の聞き方の調子や運営側のコンディ

ションによって変わる。たったひとつの答えではないことをわたしたちは自覚している。釜芸で行なわれていることは非常に多様で、事務局さえ計り知れない。釜ヶ崎という街、行き交う人々、喫茶店のふりをしたコクルーム、そして釜芸、これらがお互いに微妙に干渉しあう。釜芸ではまず2時間という講座の枠と会場の空間、先生役がいるという一定の型がある。そこには純粋に芸術やその教科そのものについて学びたいという人がいる。そして学ぶ姿に「学ぶとは何か」を気づかされる人がいる。釜ヶ崎というまちについて学んでしまうこともある。自分とはまったく違う人との出会いを学ぶ人もいる。いつも出会っている人ともう一度出会いなおす人もいる。想像力を磨く人もいる。自分の価値観を問いなおす人もいる。それぞれの視線の交錯がさらに場を濃厚なものにしている。釜ヶ崎芸術大学で学べることは何か。それはわたしたち自身に問われている。

上田假奈代・植田裕子

釜芸 日誌

2013年9月6日から2014年3月29日まで、60回の授業を重ねた釜ヶ崎芸術大学のあゆみを、スタッフ記録、講義ノート記録、写真、参加者の感想などからふりかえります。



表現1 講師：岩橋由莉

2013年9月6日（金）18:00～20:00
@西成プラザ

▶スタッフ記録より

假奈代さんから開校の挨拶。今日呼ばれたい名前と、なぜここに来ようと思ったのかを、話をしたい人から順に話してゆく。はじめて会う方、遠方から釜芸のために来た方、昨年参加してくれていた方（どこかでちらしを見つけてくれたようで嬉しい!）などが入り交じって、最初の授業が始まる。「お酒を飲む代わりに来た」「常に感じる空虚感をどうにかできないかと思い来た」「誘われて何もわからず」など理由も様々。おじさんたちの力のある話が続き、釜ヶ崎についての思いも語られる。遠方からの参加者からは、「ここでの話には他にはない厚みがある」と。由莉さんからは「吸い込むことがたくさんあってはじめて吐き出したい（＝表現したくなる）」との言葉が。（植田裕子（以下ゆ））



音楽1 講師：野村誠

2013年9月7日（土）14:00～16:00
@西成市民館

▶スタッフ記録より

昨年の野村さんの音楽の授業がおもしろくてまた来たという人多数。「楽譜を読めるようになりたい」という声があったので、まずは五線譜の読み方から。熱心にノートをとる人も。次々に質問が飛び出し、内容もあちこちへ跳ぶが、野村さんはどこからどう話すか一番伝わるのか丁寧に考えながら答えてくれる。みんなで「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド」と声を出してみたり、楽器を持って、リズム譜を見ながらにぎやかに音を出してみたり。「今までわからなかったことがやっとわかった!」「楽譜書いてみようかな」「復習しなあかん」と声が聞こえる。（ゆ）

▶受講生の感想より

小学校の音楽の時はあまり好きではなかったが、少し音楽の楽しさを見つけたかもしれない。（由良）

佐野さんや…

話をした人 小西六
詩をつくった人 黒沢
佐野さん
あなたとやった『桃太郎』
もうできないんやねえ
さびしいね

名前は「むすび」
オッチャンたちの紙芝居劇団
九十四歳の最高齢で、
さっさと引退したらよさを
いつもあなたが一番のスターで桃太郎
わしは退治される鬼やった

西成プラザでやった
保育園んぼどもたちの前でも
大学にも行った
いつの間にか姿見せんようになって
入院してたそやないか
知らせてくれんから
見舞いにも行けんかった
水くさいやんか

刃をきくと振りかざした
わしは切られてごっと倒れる
あなたの凛々しいその姿
ときどき紙芝居を忘れて
二人で美演しちやっただねえ
もうできないんだねえ
さびしいねえ

幸福

話をした人 黒沢
作をつくった人 小西六

父親を亡くす
さびしく、そしてやさしく、 接してくれた父
血はつながっていなくても
ジツの子供のように
愛していてくれた父
幸福な父であった
幸福な子であった

アルちゃんの前

話をした人 アルちゃん
詩をつくった人 しょうゆ

ほくが涼さんと会ったのは中の時だった
一クラスしかなかったんだ
ときどき目が合ったけど、話したことなかった
高校も同じだったから
三年間一緒だった
自転車通学の路で出会うと
わざとがたがた追いこした
やっぱりなにもいわないまま
二人は別々の大学に行った

あれは私たちの夏休み
暑い暑い日だったな
松浪さんのジッペンシユギの本を読んで
急に思っただ
彼女に今会わなければ…
どうしても会いたくなって
彼女の家まで自転車をこいだ
電話番号も知らなかったから

ちょうど家に彼女とお母さんがいて
よつこんでぼんを迎えてくれた
甘い桃をちぎるなり
ほくはプラトンの対話の本の話をした
たった二時間だったけれど、楽しかったな
好きとは、いわずにそれっきり
でも、それでよかったと思ってる
彼女は、水あめ屋のお嬢さん
青い水あめ
片思いの味

しょうゆさんから聞きまして

話をした人 しょうゆ
詩をつくった人 アルちゃん

しょうゆさんは、まじめな会社員のお父さんの一人娘
思春期の頃
お酒、パン、コケイバで、たびたびは会えなくなり
お父さんが、きらいになって、家出した

私のほんとうの名はゆき子
認知症になったお父さんが
私が結婚し子どもがいることをわすれ
「お前、家に帰ってきたのか」
私が出た時まで時間はさかのぼり
家出で心配していたお父さんになって
うれしそうに声で泣き顔になった

いちばん先にわすれられたのも
私の名前「ゆき子」
名前のように
お父さんの記憶はとけてます、私はいなくなった
私は今なくなったお父さんのことを
あなたが、なつかしく、
おもいだしている
お父さん、ありがとう



詩1 講師：上田假奈代

2013年9月9日(月) 14:00 ~ 16:00

@太子会館老人憩の家

▶ スタッフ記録より

今日呼ばれた名前と夏の思い出を語る。まどみちおの詩を何人かで朗読。参加者が多く、途中で帰った方も、途中で来た方もいる。講師がこの夏亡くなった方の話をしたことで、この日のお題は、「会いたい人」になる。ふたり一組になりお互いについて取材しあい、相手の話を詩にして、朗読する。今は亡き人や身近な人、初恋の人…いろいろな人のことが話される。4歳の男の子が場を和ませてくれたり、Aさんが参加者をしきりに写真におさめていたり。韓国語のまるでうたのような朗読も聴くことができた。いろんな声があり、いろんなリズムがあり、自由な詩がたくさんあった。終了後、みんなの詩をボランティアの方がワード入力してくれる。ありがたい。(上田假奈代(以下))

天文学1 講師：尾久土正己

2013年9月20日(金) 18:00～20:00

@西成市民館+三角公園

▶スタッフ記録より

中秋の名月の翌夜ということで、満月の話を中心に。尾久土先生は、参加者の質問に答え脱線しながらも、わくわくする雰囲気を保って話してくれる。はじめて人が月に行った時に聞いていたのは『Fly me to the moon』だという話にはじまり、何をしに行ったのか、月はどうやってできたのかなど。後半は、三角公園で大きな望遠鏡で月を見る。公園では、街頭テレビを見ている人、『花は咲く』を独りで歌っている人などが、満月の明かりに照らされている。望遠鏡の後ろに列をつくる。望遠鏡の中の大きな月が見えた瞬間に、のぞく人の表情が変わる。「見えた」と目をまん丸にする人。「こういうふうにするのは中学生以来や」という声も。(ゆ)



書道1 講師：畑中弄石

2013年9月21日(土) 14:00～16:00

@西成プラザ

▶スタッフ記録より

「今日は童謡の歌詞を書きましょう」先生のお手本とそれぞれの童謡の由来を解説した用紙を自由にとってもらおう。童謡の背景を知ることが大切。最初の文字が大きくなってしまい、一行に収まらないTさん。先生からのアドバイスを受け、何回か書き直すうちに全体のバランスがとれるようになってくる。Tさんは自分の人生についても語りだす。それを熱心に聞く畑中先生。絵を書きたい人は、絵を描いてもよいとのこと。書に色鉛筆で絵を書き加えた作品が出来上がる。どんどんいいのが出てくる。みんなで「日本童謡の書展」に応募してみることに。(遠藤智昭(以下え))

表現2 講師：岩橋由莉

2013年9月27日(土) 18:00～20:00

@西成市民館

▶スタッフ記録より

特にテーマなど設定せず、今の気持ちを少しでも言葉で表現する。けれど沈黙も表現、と由莉さんから話される。敷さんが口火を切って昔好きだった子について話すと年齢の話に。するとRさんが「今日初めて本名で参加する。61歳になって自分の名前に込められた親の想いを考えるようになった」と言う。Mさんは姓が3回変わった。名字の話から辛かったことも時代についてTさんが話します。「死のうと思ったこともあります」と自殺の話へ。続くHさんも妻の介護中に死のうと思ったが兄弟に迷惑をかけると踏みとどまったという。死の話からNさんは自分より10歳若くして亡くなった友人について、そしてご自身の奥さんが28歳でガンで亡くなり、精一杯子育てしたことを話す。(え)

感情1 講師：水野阿修羅

2013年9月28日(土) 14:00～16:00

@太子会館老人憩の家

▶スタッフ記録より

自己紹介は阿修羅さんご自身から。暴力的だったという阿修羅さんが感情について考えるに至るまでの話を。参加者からはそれぞれ「感情」にまつわる思いや悩みが話される。そのあと、参加者どおしでアンケートをしあったり、あいこを目指すじゃんけんをしたりして、どんな気持ちになったかを話して共有する。「一緒だったら楽しい。違っていたら楽しい。両方分かっていくと怒りが少なくなる。ただし怒ることも大切です。答えはひとつではない」と阿修羅さん。(え/ゆ)





ガムラン1 講師：中川真

2013年9月30日(月) 14:00 ~ 16:00

@太子会館老人憩の家

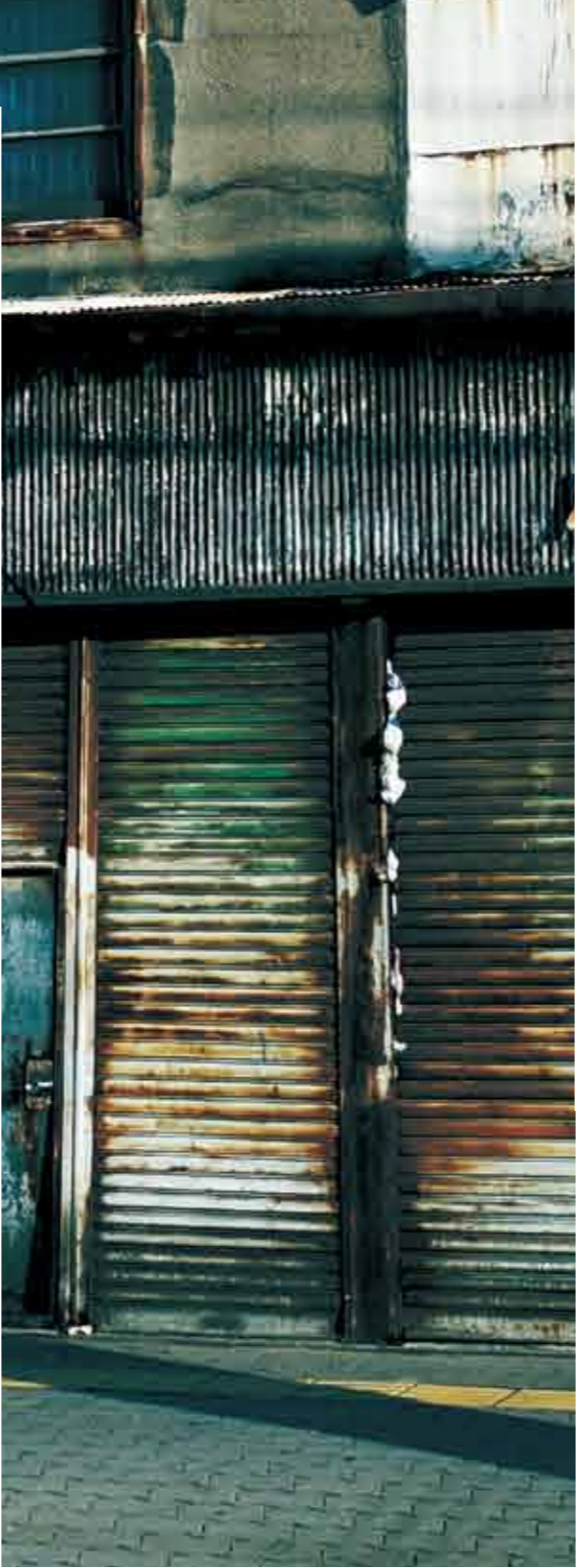
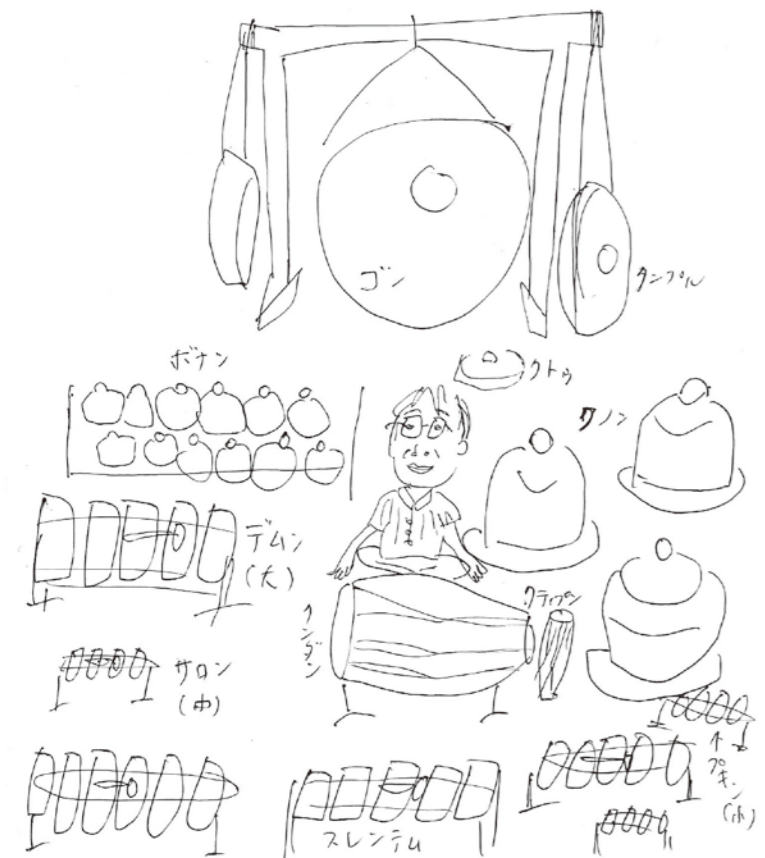
▶ スタッフ記録より

「今日は、インドネシア人になってもらいます。1曲できるようにしてもらいます」と先生が笑いながら言うと、「えー!!!」と揃った声が聞こえ、良い雰囲気です。先生からの約束は一つ! 楽器をまたがないこと。インドネシア人は楽器も隣人で、リスペクトしているから。5分ぐらい自由に楽器を触らせてくれる。力いっぱいたたかなく、とっかえひっかえ楽器を変わる人、1つの楽器に集まる数人。「さっそく曲を弾いてもらいますよー」と先生。3の音、2の音、と試しに叩く。玉置さんに、「セーノ」のかけ声役になってもらう。嬉しそう。みんなに届くように声に力が入る。Kさんの太鼓を先生が「めっちゃくちゃ良い! 安定してる!」と褒めると、「おー!」と喜ぶみんな。すでに関係ができていく感じ。全員が一曲を通して叩くと、先生が「バッチリ!」みんなが拍手して喜ぶ。表情が柔らかい。後半は、どんどん難しくなっていく。横から勲さんが、茶々を入れて笑いも飛び、先生が「(音楽が)めっちゃくちゃめっちゃくちゃ」と止める場面も。坂下さんが、ケラケラ笑っている。真剣な質問も飛び、ややこしい説明に対して「もっかい言うて!」とかわいく言うおっちゃんに、クスクス笑いが聞こえる。坂下さんはケラケラ笑っている。うまくできなくて笑っている。勲さんに代わってもらっている。「すぐにはでけへんから、難しい、の言葉を、楽しい、に変えるようにしてるんです」と先生の言葉。質問タイムには、何歳からやるの? バリガムランとジャワガムランの違いは? 楽器はどうやってできるのか? など質問が飛び交う。真剣に聞くので部屋が静か。最後に先生は、「ガムランやっていて、他の人に教えるためにかけ声を出しているのは初めて聞いた。スピリットを感じました。そういうことなんですよ」と。(山口諒子(以下や))

▶ 受講生の感想より

脳みそにしみ入るようなひびきが気持ちよかった。(イワサキ)

9月30日(月) 記録 No.1 スタッフ 3名
 ガムラン (19名) 中川真 (2名)



哲学1 講師：西川勝

2013年10月4日(金) 18:00 ~ 20:00

@西成市民館

▶ スタッフ記録より

西川さんの自己紹介の中では、哲学との出会い、「人生で抜きにできないことを考えることが哲学だと思う」と仰った鷲田清一さんとの出会いなどが語られる。続いて西川さんから「哲学することは、自分で考え、それを言葉で表現し、その理由を語ることはないか」と提示される。4つのグループに分かれ、「哲学に対する思い、今日なぜ来たか」をわいわい話す。それを西川さんがうけ、「哲学」という言葉に込められた意味、ソクラテスの哲学に対する姿勢など、話が展開してゆく。後半は、「人生で抜きに出来ないことは何か」についてまたグループで話を。ひとりずつキーワードを出す、その中から「うんこ」についてみんなで哲学してみることに。「いうんこのためにはいい世界が必要だ」「うんこは体の言葉だ」「うんこにまつわるルール」「なんでこどもはうんこが好きなのか」などが、時には真剣に、時には笑いもありながら語られる。(ゆ)

▶ 受講生の感想より

大文字やきの日、4才ばかりの娘が小文字のようなかわいいうんこを土壇にやって、今は亡き人がちりがみでくんでくれたことを思い出しました。(坂下)



「人生で抜きにできないことは何か」を語る人がおもしろいことの本。

お酒	お金	人間関係	琵琶湖
眠る	自由	うた	家
うんこ	人	学び	肌
トイレ	お茶	山で生きた	
歯がき	ゴミひろい	食べる	
煙草	脳みその中	俳句	
ミッキー	電気	エロキアパのあー?	

今日の感想

Sさん 65年前の自分のうんこの状態を思い出した

Mさん 今日来たうんこ、来たよから、たどす。

Pさん 楽しかった。外に出たら楽しそうなお声かした

?さん やっぱり哲学好き。と思、アキ

?さん 身近にその何で「哲学」を学ぶ人を見た

Yさん かつて大人にされた初めに来たうんこは「楽しい」

Kさん うんこのおもしろい哲学、いいなと思、アキ

?さん こゝろが思い出した

?さん 今日はおもしろいと思、アキ

こゝろ、アキ、自分の真と周りを、と



詩2 講師：上田假奈代

2013年10月5日(土) 14:00~16:00

@西成市民館

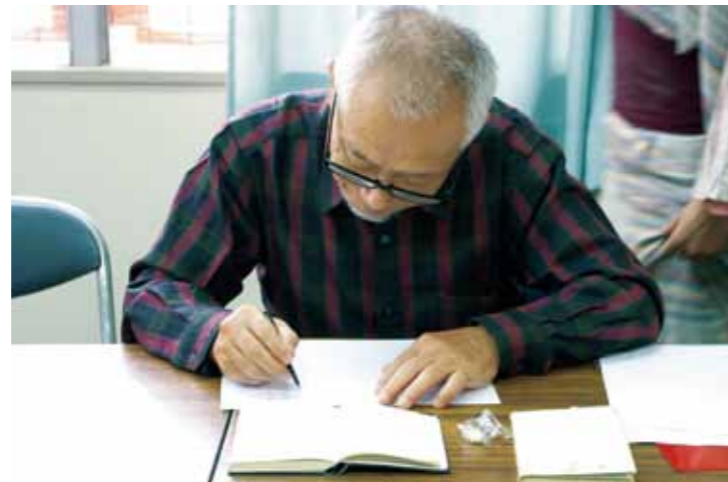
▶ スタッフ記録より

この夏亡くなったいちろーさんを思い假奈代さんが作った詩を朗読。目を閉じ聞く人…、その声に、蒸していた空気がすっと通ってゆく。みんなの自己紹介では、「釜芸に来るのが楽しみ」「詩をつくるのは生まれてはじめて」「ゆううつ病になりかけている」などの話が。ひとりずつ作る人、ふたりずつ作る人、数人で作る人、3つのチームに分かれる。テーマはみんな同じ「秋」。詩をつくっている時間、隣の保育園からはお昼寝から起きてきた子どもの声が聞こえて来る。みんなで連詩を作るチームでは「みんなばらばらなのにひとつの詩を書くちゅうのは難しいなあ」と言う人も。順番に朗読発表をすると、笑いがおこったり、大拍手がおこったり、「なんで私のことわかったの」と絶賛する声があったり。授業後、ココルームで一緒にお茶を飲む人も。(ゆ)

▶ 受講生の感想より

私の話から作ってくれた詩がものすごく私のことを物語っていて、おどろいたとともに、非常にうれしくなりました。誰かをおもって出てくる言葉のおもしろさというのを感じました。(杉本)

三輪 さん	たかはし さん	たろろ さん(5才)	玉置 さん
「生きてるより 死んだ方がいい」	「初めは ときどき市民館が 会える。ゆい」	「すももがたの フロント」	「こうして だいたい一生 たいてい思 会えた。お互い えんじだつた
「病に罹りか 3ヶ月で、明 お前のま 言われた。生	「いろいろ もらった」		



秋をさがしに
最後にタイトルをつけた人 くろちゃん

今年の秋はなかなかはじめられない
毎日暑い日が続く
でも店先にはぶどうや柿やいちじくやさんまも…

店先に並び、マルやサンカクやシカク
秋はいくらで買えるのだろう
大きなサイフに秋を買える、お金は入るだろうか
そんなに高くなっても美味しい果物など

秋をたくさん買って
また暑い日が続く…
秋はどうやってらはじまるの？

夏すぎて秋がくると夏に戻れぬ
秋から冬になって行くが
来年の春のことまで思えない

あしたは山へ出かけよう
それともおサイフ抱えて街のお店へ
かくれていた秋がほほえんでくれるかもしれない

受講生の作品

お笑い1 講師：大瀧哲雄

2013年10月7日(月) 14:00~16:00

@太子会館老人憩の家

▶ スタッフ記録より

まずは先生の自己紹介。「漫才は基本二個一で、友情を作るもの。隣の人とインタビューしあってください」そして順番に前に出て相手について紹介。大きな深呼吸をする人、話が長く先生に切られる人、ジェスチャーで笑いを起こす人…先生も爆笑。漫才はどこから来たかのレクチャーのあと、後半には実際に漫才をする。休憩時間も熱心に練習や打ち合わせをしている。コンビ名もユニークで漫才も台本破りの人や、アドリブ上手な人、棒読みな人、打ち合わせが上手く行かず噛み合っていない人、それぞれが味のある漫才。見ている人も真剣に笑って、失敗しても、誰もが見守る。見る、聞く、前に出て見せる、がみんな上手だった。(や)

表現3 講師：岩橋由莉

2013年10月11日(金) 18:00~20:00

@西成プラザ

▶ スタッフ記録より

前半は、「これだけはやってきた or やらなかったことについて」。自分のタイミングで好きなように話をするが、話題はギャンブルのことに。初めての方がいなかったため、安心感はあるが緊張感がなく、いつものおしゃべりに近い雰囲気。釜芸での熱のある語りは、新しい人との出会いの中に生まれるのだなど感じる。休憩後は、架空の話をひとり3行ずつ書いて、隣の人にまわし、その話をよく読んでまた物語をつなぎ、隣の人にまわしてゆく。あちこちで、「わけわからん」と笑い声があがりつつ、みんな真剣。8つの物語ができあがり、順番に朗読。石川さんが、すべての物語に「ミッキ」を登場させていて、それがそれぞれの物語におかしな影響を与えていて、笑いをこらえられず、最後まで読めなくなる人も続出。みんなで笑い転げた後半だった。(ゆ)

▶ 受講生の感想より

表現の時間に参加させてもらって、自分は、ずいぶん前向きになったと思います。最初の頃は、自己紹介をするだけで、ドキドキしていたけど、今はそんな事もなく、自分から喋れるようになったと思います。表現に参加させてもらったおかげです。ありがとうございます。(M)



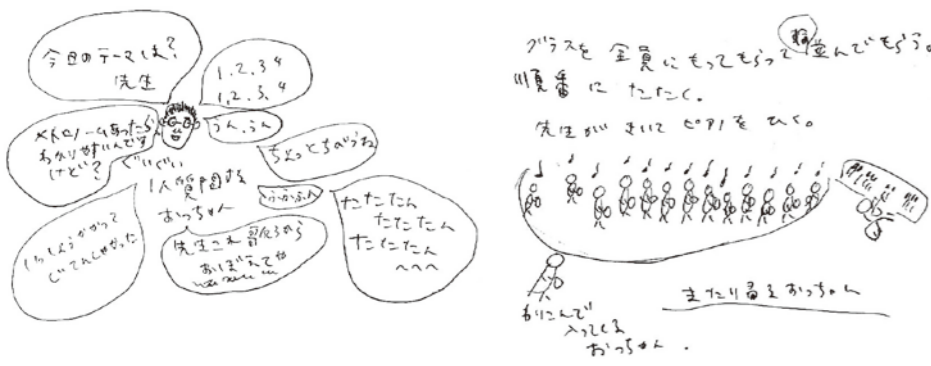
音楽2 講師：野村誠

2013年10月12日(土) 14:00～16:00

@西成市民館

▶ スタッフ記録より

音符や拍子の説明が続くが、おじさん達は静かで、質問すら飛び交わない。途中ずかずか入ってきたおじさんが、この流れをバチッと切り、「先生覚えてや、歌った音を音符にしてみても」と要求。野村さんはすらすらとホワイトボードに書いて見せる。それを見るとまた部屋から出ていく。何もなかったかのように授業は続く。コップで音程をつくってみようという話になるが、水を入れて音を作るのに手こずる。音を出すと口々に「持ったら音変わるな」。最後は各々に何かの言葉が書かれた紙を見て、誰にも見せずに、そのイメージにあう音を演奏してみる。あとで誰がどんな言葉を見ていたのか種明かし。波、やどかり、浜辺の砂。それぞれ音の解釈が違っておかしい。(や/ゆ)



絵画1 講師：本宮氷

2013年10月13日(日) 10:00～12:00

@ニカイ!文化センター

▶ スタッフ記録より

前半は、顔のパーツの平均的な位置について学ぶ。○と□を組み合わせて描き、線の引き方について指示があるが、なかなか難しく、隣の人に聞いたりしながらわいわい書いてゆく。後半は、絵を描き慣れていない人と、よく描いている人とでペアになり、お互いの顔を描き合う。さらさらと鉛筆が紙の上を走る音。書き手もモデルも真剣なまなざしだ。前半のワークを経たことで、人の顔を観察する感覚が少しついたように感じる。ピピとタイマーが鳴りクロッキーの時間が終わると、緊張感がふっと解け、どこが難しかったかや、顔の形のことなどを、みんなが話し出す。線のタッチ、伝わって来る雰囲気など、十人十色の絵が仕上がる。最後、二人一組で記念撮影をしておしまい。(ゆ)

考案者も手もは おもしろい。ちよちよとえんぴつを握り、ほろほろとえんぴつを握る人。せろせろとえんぴつを握り、うろいろな握り方を知らない人。ぎゅーっとえんぴつを握り、カツカツと鉛筆が紙を削る人。

描くことに慣れていない人と そうでない人が肩を並べ、ちよちよの握りにえんぴつを握る。



哲学2 講師：西川勝

2013年10月19日(土) 14:00～16:00 @西成市民館

▶ スタッフ記録より

一人であることについて西川先生から様々な話がされ、いくつかのグループになり、意見交換をする。「咳をしてもひとり」の話。「〇〇も一人」の〇〇に何を入れるか? 「弁当たべて」「秋の夜長に」などの意見。生まれてくるのも一人、死ぬのも一人。人生は一人であるということ避けられない。だれかのそばで一人でいられる、一緒にいられるけど干渉しない、という場が必要だが、意外と少ない。そして自分にとって役にたつ、たたないということではない場の大切さ。一人がよくわかるのは二人の時だという話。禅の「啐啄の機」(そったくのき)の話で授業は結ばれる。(え)

▶ 受講生の感想より

こどく、どくりつどっぽ(S)

お笑い2 講師：大瀧哲雄

2013年10月21日(月) 14:00～16:00 @喜望の家

▶ スタッフ記録より

まず会話のスキルについての講義を一時間ほど。熱心にメモをとる人も。コミュニケーションについて型から学ぶ機会はあるかもしれない。いろんな質問が飛び、先生からは怒られ上手になる方法なども伝授される。とにかく笑いというのはポジティブだ。エンドルフィンが分泌されて癌も治るというからびっくりだ。休憩もろくにとらず、ペアで台本に書き込んでいる。発声練習のあとコンビ名を決め、5組が順番に披露する。「声は大きめで、お客さんと漫才することをこころがけて。失敗はないから」とアドバイス。おっちゃんや若者のペアや、アル中で断酒中の人とお酒を飲む人のペアなど、それぞれ一生懸命頑張りと、友情が芽生えたようだ。(か)

▶ 受講生の感想より

「お笑いに失敗はない」を忘れずに、日常会話でウケを狙ってみたいです。(Y)

表現4 講師：岩橋由莉

2013年10月25日(金) 18:00～20:00

@西成プラザ

▶ スタッフ記録より

呼んでもらいたい名前を名乗る。常連石川さんの「今日はデムーロで」という発言で一気に場が和らぐ。円になって座り、まずは「はい」という言葉を、リズムにのって人に伝えるワーク。ここでTさんがやって来て自分の歌のCDを披露。歌い出すもなぜか二番の途中で終了。ゲーム再開。「わたし、あなた」を指をさしながら言う。それを同時に2カ所、3カ所に増やし大混乱! 休憩後、自分の手を右の人の左手の上に置くゲーム。次は各自小物を出して隣の人にリズムよく手渡してゆく。「5円がいつの間にか500円になったらええのにな」と坂下さん。実際には5円玉がなくなる。Mさんの提案で目を瞑ってやってみることに。坂下さんの「隣の人の手を握ってしまった」で大笑い。休憩後二人一組で、相手の手の動きを真似て動かすゲーム。最後は二人、三人で体で文字を作ったり、相手と一緒にこの部屋の中にあるものを体を表し、他の人がそれを当てる。普段しない格好にまた大笑い。からだも神経も思いっきり使った二時間だった。(え)



感情2 講師：水野阿修羅

2013年10月28日(月) 14:00~16:00

@喜望の家

▶ スタッフ記録より

8つの基本感情のイラストの中から今の自分に合っているものを選び、名前にそえて自己紹介。お金の心配、健康状態、今日のできごとが語られる。自分の気持ちに気づくと暴走しないですむが、男性は特に自分の気持ちを知るのが難しい。感情を出さないよう教えられ、わからなくなる。わからなければ動揺しない、迷わない。でもそれは暴力的な言動につながりやすいと阿修羅さん。『快樂は重箱のスマに』という本の目次を見ながら小さな快樂について話す。ネコ、耳かき、発汗、小銭、全裸水泳…。続いて隣の人の肩を交代でもむワーク。どう感じたかについて話す。嫌なときは「嫌」と言う。感情的になり止まらなくなった時に力を抜く具体的な方法について。一人が椅子の上に立ちもう一人を見下ろし話をするワーク。男性は背の高さが威圧感を与えていることに気づきにくいという話も。(え)

狂言1 講師：茂山童司

2013年10月31日(土) 14:00~16:00

@太子会館老人憩の家

▶ スタッフ記録より

童司さんの紹介に始まり、狂言とは何かという話。約650年前の新喜劇であり、昔は野外で演じられていたという説明に、参加者は関心を抱く。また、能は悲劇で歌劇であることに対し、狂言は喜劇で会話劇であることを知る。狂言を始める前に、サイボーグ009というゲーム。「伝統芸能」という言葉に構えていた人、緊張していた人も、ふっと和やかな雰囲気になる。そしていよいよ狂言の動きや歌と踊りを実際にやってみる。型や動きの複雑さに、参加者は悩ましくも楽しい頭の体操をしているようだった。また、身体をゆっくり使う心地よさに、和やかな雰囲気が保たれ、笑いがいくつも起きた。質問タイムをもうけ終了。(大瀧千輝(以下お))

▶ 受講生の感想より

おもしろい! 魔法みたいな時間でした。

長生きはいいのだと思う。
狂言のイロハを舞台で
やるとは、明日のことは
わからない。
腹式呼吸と発声練習
して肺気腫を治したい。
あと7日で70歳、
坂下のり



絵画2 講師：本宮水

2013年12月1日(日) 10:00~12:00

@ニカイ!文化センター

▶ スタッフ記録より

水彩画の描き方を習う。3色で描くという決まりを作り、向かいの人の顔や自分の描きたいものを描く。白い紙、水彩えのぐ、カラーパレットが用意されている。筆の使い方はとんとんと色を置くようにすることが薦められた。えのぐを走らせる手、「トトト」と紙を叩く音。50分程すると、真っ白だった紙に鮮やかな色が広がっている。絵の中心には、向かいの人の顔などが。一段落付くと教室を出て、道で、えのぐのドリッピングをし、絵に遊びをつける方法を学ぶ。最後の20分は、今まで描いた絵に詩を加えたりして仕上げを。それぞれの絵の描き方、ストーリー、思いを暖かい雰囲気でも共有し、授業が終わる。(お)

お笑い3 講師：大瀧哲雄

2013年12月2日(月) 14:00~16:00

@喜望の家

▶ スタッフ記録より

舞台上上がる時のコンディションについて。過去から一番楽しかったこと、一番苦しかったことを話す。人に弱みを見せることで、より踏み込んだ関係になれる、と先生。今日の台本は「三分クッキング」。読み合わせする。台本をアレンジする組も。コンビ名を決め、順番に発表。アレンジした組、台本に忠実な組、といろいろ。Sさんが、初めて漫才の発表に参加。二人で並んでひたすら台本を読む。台本を見ればなしで、声も小さかったが、それがかえて面白みにつながっていた。最後のプリントには「人生で言わないようにしたい言葉は何か。それを言わないようにする」とある。Kさん「苦しいことは早く忘れたいもんな」先生「人に話すと、忘れられる。他人事になる。自分を否定すると、漫才は伸びない」。(小手川(以下こ))



音楽3 講師：野村誠

2013年12月7日(土)

14:00~16:00

@太子会館老人憩の家

▶ スタッフ記録より

「今日はどうしましょう」と先生が言うなり、参加者から質問が続く。「ボレロって曲があるけど、ずっと同じメロディが続くの何がいいのん?」「いい楽器ってどんな楽器?」「先生が手拍子する時、いい音出そうとしてますか」など。先生が質問に一つずつ丁寧に答えていく。話の流れから、手拍子だけで音楽をやってみることに。自由に叩くが、不思議とうるさくならない。お互いの音が聞けていたからかも。左手で3拍子、右手で2拍子をやってみる。「音楽は算数だ」という声。後半、コップに水を入れて、円になって順番に音を出してみる。時々座り順を替えてみたりして、なんとなく音の流れができてきたら、先生がピアノを入れてゆき、一曲できあがった。(沖田都(以下み))



宇治川の清き流れに

話をした人 花井紀子
詩をつかった人 釈迦舌兼行

花井紀子さんへ。

一、あなたは宇治橋を何回往復しましたか。
【私の答】 新聞配達で三百回以上あります。

二、あなたは宇治川の上流のあずま屋で
ホームレスをしたことがありますか。
【私の答】 神社でぬすんだという一升瓶を
もってきてくれた人と一緒に酒をのんだことがあります。
一週間ありがとう。

三、あなたは宇治川のほとりの平等院の
十円玉を今まで何枚つかいましたか。
【私の答】 七〇年生きているので数られません。
何百枚か何千枚わかりません。

四、あなたは宇治川で急流にあって命びういしたことがありますか。
【私の答】 はい、あります。50mほど流され
かすりきずひとつつきませんでした。
今七〇年生きているのは奇跡的事実です。

五、あなたは春満開の塔之島で恋をささやいたことがありますか。
【私の答】 クリスマス用のプレゼント「グリーン」という
童話を宇治川にあげました。
彼女とは手をにぎっただけで四八年あっていません。
今ぼくのことを考えていないかな。

【ラストメッセージ】
宇治のおじいさん、おばあさんに13才の孫をつれていっていいお正月を。

除夜の音をきくまえに

話をした人 釈迦舌兼行さん
詩をつかった人 花井紀子

シヤカさんは貼り絵をする
河童の川泳ぎの貼り絵
小さい頃泳いだセンダイ川が今も流れる

大岩に腹ばいになって寝るべる河童
キュウリをつまみに酒をのむ河童
シヤカさんの代わりにうまそうに酒を呑む河童
背景にはシヤカさんの「ことばたじ」がそこそこ

シヤカさんは貼り絵をする
シヤカさんの六作めの貼り絵
除夜の音をきくまえの仕事おさめ

私は遠くに除夜の音をきき
きつとシヤカさんと出会った今日この日を忘れない

小説つくってね

話をした人 玉置世士
詩をつかった人 鈴村温

いきおいよく 話しはじめた
たまおきさん

想像しきれないくらい壮絶な人生
ベトナム戦争、家族とのかんげい
私は、まだまだあまちゃんだなあ

六分間、そんな時間じゃ足りない、
交代しても、たまおきさんのほなしになっちゃって、
だからきつと小説にしてほしい。伝えることあふれてる
小説になったら、よんでみたい
たまおきさんのことば

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

釜ヶ崎芸術大学の詩の時間を詩に
年の瀬 十七人
上田假奈代

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る

六十四＝一〇
話を聞いて詩をつくる
こころのリズムで詩をつくる
「ことばたじ」をきいてみる
あたらしさがやってくる
ひそひそとささやく
えんぴつの走る音
白い時間に ひびひびと ことばがよみ
しずかに鳩のように眠る



◎ あんどう です。よろしくお原真いします。
えー 西成に住んで10数年？
ありやん労働センター？
（詩十画について、
しほしつがけるので、
かたはたさんが、とんとんと
とめさ）
← かたはた
さんに
うたがさか、
照太郎から
産りなあって。

詩3 講師：上田假奈代

2013年12月9日(月) 14:00~16:00

@太子会館老人憩の家

▶ スタッフ記録より

はじめての参加者が多い。肩をほぐすところから詩の時間がはじまる。今日呼ばれた名前と近況報告を。最近お兄さんを亡くしたこと、来たかった釜芸にやっと来れたということなどが語られる。隣の人とペアになり、詩集を一冊持ち、相手のことを思いながら、ひとつずつ詩を朗読し合う。相手の声をよく聞くため、肩を寄せ合ったり、本を二人で持ったり。そして今日は「今年中に会っておきたい人、やっておきたいこと」について、取材し合い詩をつくることに。6分ずつ、ざわざわと取材をし合う。「風、光の感じ、温度…細かく聞いた方が詩は書きやすいですよ」と假奈代さんからアドバイスがあり、15分の詩作の時間に入る。部屋に、ペンの音だけが響く。さっきまでのざわざわが嘘のよう。「書けた!」「書けない!」と声があがり、詩作の時間は終了。こんどは、朗読にみんなで耳をすます。ふるさとの様子が目に浮かんだり、人生のワンシーンが立ち上がったたり、代弁してもらったような気持ちになったり。坂下さんは自分の詩を読んでもらう時、目をきゅーと閉じて聞いている。「生きてれば、いい詩をつくってもらえるね」最後に假奈代さんがみんなの様子を詩にしたものを朗読。また一段と静かになる。参加者はひとつも聞き逃すまいと体も動かさない。(ゆ)

▶ 受講生の感想より

- 自分ではストレートに表現できない部分をいつも他者がすなおに表してくれることに感動する。それがこの「詩の授業」。
- 目が覚めました。腹に来ました。心に沁みました。ありがとうございました。(K)

合唱部1 講師：山本則幸

2013年12月11日(水) 18:30~20:30

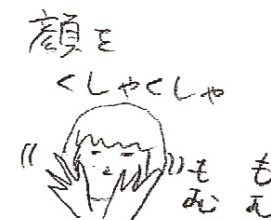
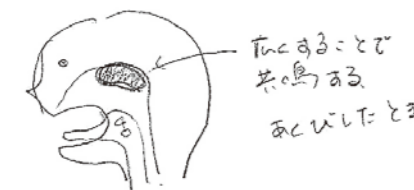
@禁酒の館

▶ スタッフ記録より

第一回目の合唱。先生とピアノの安宅さんからの挨拶。まずは、体操から。次に発声。よい合唱に必要な、姿勢、呼吸、共鳴についての確認。実際に声を出すと先生から、「よく声が出ている」と褒められる。先生からは「歌う前の状態で歌は決まる。自分で自分の声をいいと思って歌おう。上へカーブを描くように遠くへ声を伸ばしましょう」とアドバイス。ピアノに合わせて、発声練習。休憩を挟んで、楽譜を見ながら歌う。今日の歌は『埴生の宿』。参加者からは「ミックスジュースのように、いろんな声が聞こえて味のある合唱になるといいな」という声。みんなのびのび歌っていた。(み)

▶ 受講生の感想より

こえだすのもひさしぶりではじめはうたをよむのもおんていがかるいました。



表現5 講師：岩橋由莉

2013年12月13日(金) 18:00~20:00

@西成市民館

▶ スタッフ記録より

円になり、参加者が言いたいこと、近況を順に話してゆく。この日は円の真ん中にカメラが入り、映像記録撮影を試みたこともあり、緊張感が漂う。ひと花センターに通うKさんとYさんも初参加。緊張から、一度は「パス」と言いながらも、この半年でずいぶん気持ちが明るくなったことを伝えてくれる。「道ばたで知り合いに会って挨拶できるのは本当にいい」後半は、由良さんが作品制作の話をしたことから、何のために作品をつくるのかという話。由莉さんはこの日いつもに増して、みんなの話を丁寧に振り返ってくれた。(ゆ)

吉岡さん
一週間前には、ここで芝居をした
拍手をいただいた
いろんな活動に参加
いろんなびんぐがあり 釜に
みんな来た。道ばたであいさつ
できるのはほんとにいい。
郵便で一日中、TV見てるけど
ひと花センター勉強してる
釜にいて、いいことあるせなかと
釜に来て3年ほど、
釜さんほど熱い思いはないけど
釜の生活を好きに楽しみたい

お好
豚玉
¥10
の四



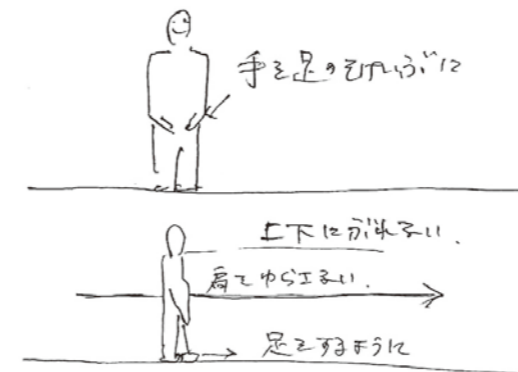
狂言2 講師：茂山童司

2013年12月14日(土) 14:00~16:00

@太子会館老人憩の家

▶ スタッフ記録より

狂言の基本動作をした後、主人と太郎冠者になって狂言に挑戦。前回に引き続き、009ゲームをする。「これ前にやったわ」と参加者が得意そうに述べる。今回は、さらにルールを増やし、手拍子にあわせてゲームを進めた。場が暖まったところで、狂言の基本の練習に移る。立ち方、歩き方、曲がり方などを習得していく。次に、狂言のセリフの練習に移る。文字にせず、口真似をして覚える練習方法に、「字に書いてくれへんと消えてしまうわ」と言葉を漏らす。そのため、ボードに字を書きつつセリフの暗唱に挑戦する。最後に主人と太郎冠者に挑戦した。(お)



ダンス部1 講師：中西ちさと

2013年12月16日(月) 14:00~16:00

@喜望の家

▶ スタッフ記録より

ダンスと聞いてもイメージについて「DANCE BOXで見たことあるからな、あんな感じ」「パレエ」「社交ダンス」「アフリカダンス」「やっぱムーンウォークやろ」などが挙がる。「参加するのはどうせ、おっちゃんばかりやから。ぼちぼちやりたい。けど、時々びしっと決めるところもあったり。折り込んでいきたい」という声も。会場をまんべんなく歩くワークに続き、目をつぶった人を動かしてゆくワーク。皆さん“ゆっくり動く”ということが、難しそうだった。参加者の皆さんが大事に動いたり、誰かを動かしたりしているところを見ると気持ちが温まる。(み)



感情3 講師：水野阿修羅

2013年12月21日(土) 14:00~16:00
@西成市民館

▶ スタッフ記録より

まず、名前と今日の気分を0~10の中で言えば、どのくらいかを各自言う。「元気の素がわかったらいいけどなー、今日は5」「いつも元気。腹減ってたけど、590円の昼定食食べたから元気。数字なし」など。次に、紙に書かれた質問に答える。質問のひとつは「好きな人、嫌いな人はどんな人か。またその人に対しどう動いているか」「嫌いな人を無視しても気づいてくれないので、目の前で嫌いだと伝えたら、距離をとってくれるようになった」という参加者も。先生からは「男性はあまり陰口を言わない。するとどんどん自分にストレスが溜まって、自分を責めて、鬱になったり自殺する人もいる。目の前で言えない場合は、第三者にでも言った方がいい。すると、なぜか伝わる。自分の表現方法をもっていることが大事」という言葉も。(み)

▶ 受講生の感想より

- 心の中でおもっていたことを口に出して言えたのでスッキリした。ずっと気になって人に言ったら、おこられるんじゃないかなと思っていたから、全部言えたので良かった。
- 感情を表に出すことは、あまり良くないことだと考えていたがむしろ場合によってはうまく感情を出すのがプラスになるのだと、気付きました。

ダンス部2 講師：中西ちさと

2013年12月23日(月) 14:00~16:00
@太子会館老人憩の家

▶ スタッフ記録より

ストレッチのあと、円になって、はじめの人の動きを隣の人が真似をして、そこに動きを付け足していく。だんだん動きが似てきてしまい、先生から「今頭の辺りだけになっているので、足の動きとかも入れてください」という指示が入る。次に、2つのグループに分かれて、伝言ゲームのようにダンスを伝達する。鏡ダンスでは向かい合って、相手の真似。「シェー」のポーズには「何か名前のついている動きじゃない方がいいですよ」という指示も。先生からの客観的な指示で、動きの多様性が少し生まれてくる。人の動きを見て真似することはできても、振りを覚えて伝達するダンスは苦手な人が多いようだった。(こ)



合唱部2 講師：山本則幸

2013年12月25日(水) 18:30~20:30
@禁酒の館

▶ スタッフ記録より

体操、歌う時のポイントの確認。発声練習から真剣に取り組みすぎて、咳き込む人がいたため、先生が上半身に力を入れずに歌う方法を教えてくれる。クリスマスの夜の曲は、『もろびとこぞりて』『きよしこの夜』。後半は勲さんが歌いたかった『アメイジンググレイス』を日本語で。歌ができた経緯を聞きしみじみと。最後は『100万本のバラ』。恋の歌を熱く歌う。ハードな練習の後には「みんなでだから歌えるけどね、一人だったら歌えないよね」「誰か一人くらい(音楽を)わかっているでしょ」「いや、誰もわかってないでしょ。笑」「そうなの!? それなのに歌えたの」「助け合いが合唱の魂ですからね」と声が飛び交う。(ゆ)

▶ 受講生の感想より

今日始めた合唱!! とても楽しく唄えました。ありがとうございました。

さ、つねにみですが、もう一曲
やりますか? やりましよう
かとう登紀子
おー1万本のバラ 100万本
ですわ!!



表現6 講師：岩橋由莉

2013年12月27日(金) 18:00~20:00
@西成市民館

▶ スタッフ記録より

言いたい人が言いたい時に言いたいことを発言する。由莉さんが風邪のため「進行はせず場を持つことだけをしたい」と最初に伝える。若い学生10名ほどが初参加で、そのためいつもより少し緊張感がある。博打、自分感謝祭の話、セカンドオピニオンの話、お兄さんが亡くなったことなど。後半はおじさんたちが学生に質問をする形で進むが、人の意見を聞きたいというより、自分の主張をしたい様子。最後になって、おじさんに強く促されてやっと、学生たちが釜の街の印象を話し出す。このまちを恐いと思うってどういうことなのか、さまざまな言葉で語られる。(ゆ)

▶ 受講生の感想より

今日、昼から釜ヶ崎に来て、この表現の授業に参加しました。おじちゃんたちのお話を聞いて、人生についての考えを聞き感心したと共に、おじちゃんたちの世代の方々と普段こんなに話をしたことなかったことに気付きました。大人の人生のことを聞くことはとても勉強になりました。(H)



9才上の兄が発達障がい、
障害が原因で貧困に陥って死んだ。
父に釜に来ることを反対された。
「ちゃんと見てこい」
西成を恐いと知った人、
花を死に見た。今日は若い人
が来ていから、若い子に聞いて
みたい。西成の地、釜の地。
このように機会をつくりたい。
どうもいから、聞いてみたい。
坂下: あいりんの会、聞いてみたい
またいから、聞いてみたい。

天文学2 講師：尾久土正巳

2013年12月28日(土) 18:00~20:00

@西成市民館

▶ スタッフ記録より

テーマは「消えてしまったほうき星アイソン彗星について」。アイソン彗星は、大きく美しいほうき星になるのではないかと予測されたが、実際には燃え尽きてしまった。地球に海ができたのもほうき星のおかげ、私たちが飲んでいる水の30%はほうき星の成分であるそうだ。尾久土先生が天文学者になろうと思ったのも「ほうき星を見たい」と思ったことからだった、と先生ご自身の人生とともに話してくれた。最後に天体観測をする予定が、天気の関係でできず、彗星に関する映像をみんなで鑑賞。若い人も年を重ねた人も一緒にわいわいとあたたかな冬の夜。(み/ゆ)



写真1 臨時講師：上田假奈代

2013年12月30日(月) 14:00~17:00

@釜ヶ崎支援機構お仕事支援部

▶ スタッフ記録より

若原先生の代わりに假奈代さんが臨時講師としてスタート。釜ヶ崎をカメラで撮ることについてお話。カメラの使い方説明。若原先生のレジュメと写真に沿って説明。まちに沢山ある「言葉(文字)」を見つけて撮影してくる。三角公園のまわりでは、カメラは出さず、まず商店街付近まで行ってから各自撮影をしまわった。その後プロジェクターにて、撮ってきた写真を鑑賞・フィードバック。看板の謎の文字「やるぞ!」、「家賃値下げ15,000円!」や、文字でしりとりを作っていたり、文字ではなく、言葉のように感じる風景を撮影している人もいた。(み)



受講生の作品



受講生の作品



写真2 講師：若原瑞昌

2014年1月3日(金) 14:00~17:00

@釜ヶ崎支援機構お仕事支援部

▶ スタッフ記録より

新年の授業は、すぐ側の三角公園で行なわれている越冬闘争のソフトボール大会を撮りに行くことから始まる。釜ヶ崎はカメラを向けられることが嫌な方も多いまちだ。事前に実行委員会に話をし、記録係の腕章も用意した。和やかなソフトボール大会から帰ってみんなで作品鑑賞。ある一場面を執拗に撮っている人、視線をどんどん変える人、ソフトボールとは一見関係ないものを撮る人、地面ばかりを撮る人などさまざまで、若原さんがそれぞれの特徴をとらえ、的確に褒めてくれる。その人のベストショットはこれ、という一枚も選ばれる。(ゆ)

写真3 講師：若原瑞昌

2014年1月4日(土) 14:00~16:00

@釜ヶ崎支援機構お仕事支援部

▶ スタッフ記録より

この日のテーマはセルフポートレイト。出かける前に、ロバート・メイプルソープなどの作品を見て、様々な撮り方があることを知り、街に出る。カメラを持った手を伸ばして…、何かに映った自分を…、セルフタイマーを使って…、45分ほどそれぞれの好きなように撮影の時間。後半は会場に戻り、みんなで作品鑑賞。それぞれの作品に若原さんの細かなコメントが入り、撮影者からはどうやって撮ったのか、何を狙って撮ったのか、などが語られる。同じテーマでもこれほど違うものが撮れるのかと実感できる時間だった。(ゆ)



受講生の作品



受講生の作品



写真4 講師：若原瑞昌

2014年1月5日(日) 14:00~16:00

@釜ヶ崎支援機構お仕事支援部

▶ スタッフ記録より

この日のテーマはポートレイト。リチャード・アヴェドンの作品と、若原さんが釜の人たちを撮った『男前写真館』の写真の紹介。うわーと声があがる。二人一組になって裏庭へ出、真っ白なシーツの前で相手を撮る。撮影し合う人とは二人で裏庭へ行くのでドキドキするが「どう話をするのか、距離感をとるのかも含めて撮影です」とのこと。撮れた写真をスクリーンに映して作品鑑賞。何も狙っていない写真がよく「カッコ良くとか、ウケ狙いとかではなく、目の前にいる人…人ってあるがままでほんとおもしろいですよね」と若原さん。(ゆ)

ダンス部3 講師：中西ちさと

2014年1月6日(月) 14:00~16:00

@喜望の家

▶ スタッフ記録より

ストレッチ&創作。各自で「起きてから家を出るまで」をできるだけしゃべらずに身体でやってみる。人それぞれ、動きが違って面白い。とても細かく動く人もいれば、ざっくり動いてすぐ終わり!という人もいた。何をしているのか、よく分からなくても、それはそれで面白い。ゆっくり丁寧に丁寧に動く、というやり方を選んだ人もいたが、ずっと見ていられた。作った動きの中から先生が1つピックアップし、繰り返したり、さらにゆっくりにしたりして、一人一人に合わせて動きを作っていくようにしていた。ここからどのように発展するか。(み)

▶ 受講生の感想より

これもダンス! 楽しい。感情も見える。(U)



狂言集中講座 講師：茂山童司

@太子会館老人憩の家

■ 1日目 2014年1月13日(月) 17:00～19:00

夕方から集合。茂山童司さんの紹介とガイダンス。5日間で発表会まで行うというスケジュールを共有。みなさんのワクワクしている感じが伝わってくる。さっそく、狂言の歩き方や座り方などの動作の練習。これまでの狂言の授業でもやってきたことと、これからの予定を共有。続いて、発表会でも歌えるように「俵歌」を練習。童司さんの謡いを復唱する。狂言の言い回しはすべて耳で覚えなくてはならない。絶妙なタイミングを合わせるのがとても難しそうだが、惜しげもない大きな声で間違えながら謡っている姿は、潔かった。(み)

■ 2日目 2014年1月14日(火) 11:00～17:00

2日目からは朝11時はじめ。遅れてくる人がいるかと思いきや、みなさん張りきって来てくれた。まず、足袋が配られる。新しい白足袋が、みなさんを初々しくキラキラして見せる。次に、狂言の歩きと「俵歌」の練習。あつという間にお昼、みんなでコロシアムへ移動、テーブルを囲む。「みんなで食べると美味しいね」という会話。午後は、発表する演目について、全員でおしゃべり。ホワイトボードに、狂言に使える「おもしろい個性」―“酒好き” “曲がったことが嫌い” “禿げ”、“おもしろい組み合わせ”―“極妻と気弱な夫” “お見合い”などを挙げる。しかし、お話づくりは一転二転。うーんと頭を悩ませ、最後には全員無言になるほど煮詰まってしまう。「また明日考え直しましょう！」ということで、その日は解散。短い時間で発表まで持っていくのが難しく、悠長なことは言っていられない、と気づかされる。(み)

■ 3日目 2014年1月15日(水) 11:00～17:00

早速、お話づくりのつづきからスタート。前日の話しを受けて、すでに脚本を書き上げてきた方がお二人。全体的に、朝のひらめきも良かったのかスムーズに進む。自然と3チームに分かれ、話を詰めていくことになり、なんとか脚本を書き上げる。次に、台詞づくりがスタート。童司さんが各チームを巡り、台詞を狂言の言葉遣いに修正していく。お昼は、今日もみんなでテーブルを囲む。頭を使ったのか、バクバクと素早く食べ終え、再開。ますます、狂言の稽古も引き締まっていく。童司さんがやってみせてくれる演技を見て、同じようにやってみる。それを何度も繰り返し、やってみる。とにもかくにも、台詞を覚えなくてはならない。何度も繰り返し、やる。しかし覚えるのは、とても難しい。集中が途切れることはなかった。額には汗がにじみ、部屋はむんむんしてくる。ただただ、繰り返し稽古をして、タイムアウト。(み)

■ 4日目 2014年1月16日(木) 11:00～17:00

今日は、稽古場所をチームごとに分けて使えることになる。憩の家・西成市民館和室・カマン!メディアセンター 2階に分かれて、集中して稽古。とにかく台詞と動きを覚えるために、くり返し練習。やはり、みなさんの集中力はすごい。休憩も忘れて、ずっとずっと繰り返して練習する。「もっとこつやな。もう1回やろう」「あー、忘れた!もう1回やろう」などと絶え間なく繰り返すので、見ているこっちが「ちょっと休憩したら…」と心配するほど。童司さんが、順番に稽古場を回っていき、進行具合を見てアドバイスをする。なかなか童司さんの言うとおりの台詞や動きにはならないが、アドバイスが付け加わるたびに、彼らの輝きが増すように感じる。一日中かけて練習するものの、それでも覚えられないところがたくさん。不安の中ではあるが稽古はいったん止めて、歩き方の練習と「俵歌」を謡って、今日を終える。(み)

■ 5日目 2014年1月17日(金) 11:00～21:00

午前中は、自主練習。昼から発表会の会場へ移動する。みんなで電車に乗って、なんだか遠足のようなのだが、面持ちは疲れと緊張が見え隠れしている。九阜会館の扉をあけて、みんなで息をのんだ。目の前に能舞台が広がり、静かな喜びと緊張が走る。能舞台についての説明の後、みんなで舞台上へ。スタッフからの声援。しかし、緊張からか、昨日まで覚えていたはずの台詞が出てこない。ひや汗が頬を伝う。童司さんは、“舞台の上では独り”と一貫して、励ましたり叱ったりする言葉はない。時間は迫りどんどん追いつめられていく。そんな時コロシアムから、おにぎりとお餅がやってくる。みんなで頬張り、いよいよ開場。客席は、子どもも大人も遠くから駆けつけた方もおり、多様な場となる。緊張の発表がはじまる。成果は…大笑い。お客さんの笑い声に後押しされ、みなさんの緊張も和らいでゆく。真剣にやればやるほど、屈託のない演技が光る。子どもの笑い声も響き、自由で温かなひと時となった。(み)



狂言集中講座



音楽4 講師：野村誠

2014年1月18日(土) 14:00~16:00

@太子会館老人憩の家

▶ スタッフ記録より

参加者から楽譜の読み方について質問。野村先生が図形で説明。演奏はまずはコップから。野村先生「吹くやつはぼく得意なんですよ」と尺八のように音を出す。コップをみんなが好きなように鳴らしてゆくとガムランみたいになってきた！口をぼこぼこ。スチールバケツをガンガン。楽器袋からいろいろな「音の出るもの」を取り出し、好きずきに取り鳴らしてみる。野村先生はキーボードでメロディーを。 Rond形式にするとテーマができる。手の動きでアップダウン。楽器別で二組に分け、指揮者にあわせてみんな合奏。いい感じ！釜芸オーケストラが誕生した。(え)

▶ 受講生の感想より

- ・音のむずかしさにかんめいしました。
- ・初めて参加させて頂きました。何にもない所から音がぐが生まれたのが、すごいなと思いました。どうしたら音がくなるのか、本当に不思議です。

「例文で覚えてみる」
 ぼくは今日の朝はリンゴを食べました。
 「暑も」おいしかったです。楽しかった。
 D.Sg



ダンス部5 講師：中西ちさと

2014年1月20日(月) 14:00~16:00

@喜望の家

▶ スタッフ記録より

はじまる前からそれぞれが身体をほぐしたりしてすでにひとつの劇団のよう。身体をほぐしたり伸ばしたり。入念に身体に向き合う。身体がきゅっと伸びると「これ利くわ」「あたたた」。左右などを間違ったりしても、ほがらかに笑えるいい空気。2人1組になって片方が目をつぶり片方が誘導して歩くワークでは「信用してるで」と相手に言う人も。後半は成果発表会にむけてダンスをつくってゆく。振りを2人組で練習しながら、気になるところをちさとさんに見てもらおう。いつしかその人にそれぞれの視線が真剣に注がれて、会場はとでも静か。(ゆ)

合唱部4 講師：山本則幸

2014年1月22日(水) 18:30~20:30

@禁酒の館

▶ スタッフ記録より

ストレッチ(首、腰、手足くび、顔面マッサージ)ののち、発声練習。いつもより人数が3~4人多く、厚みがあった。本日の歌は『花は咲く』。楽譜に記号が多く、自分がどこを歌っているのかを確認するのに必死だった。が、中盤、はじめての二部合唱に挑戦してみると、そのままなんとか歌いきることができた。裕子さんがiPhoneで録った歌声をみんなに向けて聞かせてくれ、少しばらついているものの、二部合唱ができていることを確認し、参加者も嬉しそう。先生から、指揮を見やすい楽譜の持ち方についてアドバイスがあり、そうすることで少しずつ変化する歌声が垣間みられた気がした。(み)

▶ 受講生の感想より

何か忘れていた(眠っていた?)力のようなものがよきよき出て来たようでした。(N)



表現8 講師：岩橋由莉

2014年1月24日(金) 18:00~20:00

@西成市民館

▶ スタッフ記録より

いつもどおり輪になって座りざわざわから次第に沈黙。「沈黙もいいものだ」と坂下さん。Mさんの話に警察が登場したことから、Tさんが、公務執行妨害でえん罪逮捕された話を、延々と30分以上話し出す。敷さんが自分のエピソードを話したりもするが、それでもTさんの話は続く。口を挟まず見守る由莉さん。休憩を挟み、偶然通りかかったというTKさんも初参加。ちょっと不安定な感じで話の間に入ってくる。後半はMさんが主な語り手に。特攻隊だったがぎりぎり免れた話、西成についての話などが続く。今回は長い独白が多く、疲れた人が多かったのではないかと感じる。口を挟むべきなのか、そうする意味はどこにあるのか、など考えさせられた。(え/ゆ)

芸術

講師：森村泰昌 特別ゲスト：高山明

2014年1月25日(土) 14:00~16:15

@西成市民館

▶ スタッフ記録より

1時間目「見る」(森村)、2時間目「答える」(高山/田中)、休憩(職員会議)、3時間目「語る」(参加者)、4時間目「聞く」(森村)の構成。1時間目は森村さんがなぜ芸術をするようになったかの話と、森村さんの自己紹介としてセルフポートレート135点の作品紹介をスライドショーで解説。2時間目はPort Bの手法で矢継ぎばやの26の質問。3人が順に前に出て来て受け答えをする。結果的に釜芸によく来るおじさんたちが答える。次の授業のために、先生役を募集。3人の手が挙がり、職員会議を開く。名前と演題、順番を決める。でたどこちゃん先生「働くわたし」、ゆらゆら先生「うつ病とアート」、いまアル先生「夢のはなし・ゴーギャン先生について」。それぞれ10分づつ。4時間目は森村さんの「たいせつなわすれもの」の作品朗読。森村さんの表現への誠実な想いが伝わり、また、おじさんたちの声に魅了されたりで、二時間があっというま。笑いどぐっとくる感情に会場の温度もあがった。普段コルუმの日常ではおじさんたちの何度も繰り返される話にうんざりしてしまうこともあるが、今日のような場ではそれぞれに魅きつけられ、こうした場があることがおそらく本人にも、そしてわたしたちにもうれしい。表現の場の機会の重要性(うんざりする日常のなかにも必要)と、そこにある普遍性に気づく。(か)

▶ 受講生の感想より

本当に素晴らしい。月並みな言葉ですが素直な気持ちです。そして、自分でも驚きましたが(終ってみたら冷汗ものでした)多勢の方の前で、お話しが出来たこと。何をどう話したか思い出せないのですが、嬉しい一日でした。(I)



「芸術」にぞめた。
後にはいいもの、
おもしろいもの
はあつた
のよどき
「芸術」
ただし、条件がある
切実さ

「うつ病とアート」
ゆらゆら先生。
1-1をもちながら、発表

60分、除夜の鐘をうらに11番目まで

4年前、カレサ前のうつ病
そのとき、親せき人が役所に相談に117で来て
生保をうけて、税金でいかにせよ、てき
おれいしたい

うつ病のときおもしろいすと いまはいいから

そのとき、釜芸にあたりかた...
詩の部屋にいった
454545

32回行った
生きてるとは、おもしろい、てき
感動

声を出す、能舞台に2011年 エネルギーになって
かえって、笑っていいね



生きがい 由良さんのこと

話をした人 由良
詩をつくった人 河本

誰かに会いたくて 誰かと話したくて
この教室にきた
この町に生まれて 六十年生きてきた
茶臼山の池でザリガニを釣ったのが 子供の頃の思い出
絵かきさんになりたかった
おじいちゃんとおばあちゃんに 育ててもらった
不幸とは思わないけど 幸せな暮らしではなかった

書きぞめに
「挑戦」と書いた
陰を陽に変えたい
絵を描いて 詩を書いて 自由に生きたい

今の夢は 長生きしたいこと
自分の中にある
「何か」を育てて
絵に描いて 言葉にかえて
誰かに伝わるのが
私の生きがい

人生波のごとく

話をした人 河本
詩をつくった人 由良

波にゆられゆられてクレイン船
あらなみこえて いはらぎへ
今は大正で一人ぐらし
六十五才のさがみうまれの男でござんす
すきな本と映画をみる
ミステリーなことがすきである
年をとったらさきのことを考える
これから人生終末はどこなのか
一年前から手さぐりの西成で
哲学の人生勉強して手ちょうにつづった
ことがふえていくのがたのしみで
新しい発見をきたいしながら
足をほご釜ヶ崎



山崎君はガガンのガン

話をした人 石川裕敏
詩をつくった人 いいちゃん

コーナンの山崎くん、顔を見ただけでガンとくる。
すぐ体の調子がわるくなる。
それもお腹。きゅるきゅる いたむ。
もようすのは(大)の方...
あー ヤバイ、ヤバイ。
あー 困った、困った。
でも外に出るとおさまる。
だからいつも、大いそぎでレジをすませ外に出る。
ハッピー、ハッピー。

家ではぬいぐるみのミッキーマウスの植田君が待っている。
詩の先生と同じ名前の植田君に。今は一日の出来事をほなす。
コーナンの山崎君は、ボクにとってガンだ!!
ボクのはなしを植田君はちゃんと聞いてくれる。
だって、大きな目でボクの事じっと見つめてくれる。
それでもボクは次の日もガガンのガンの顔を見に行く。

いいちゃん びょうごんきんご (たぶん習作)

話をした人 いいちゃん
詩をつくった人 石川裕敏

からだかゆがんでる。子どものことは、わからなかったけど
わかいじだいは、きにならなかつたけどだんだんあのよがちかくなり
あちこちちぢょうしがわるくなる
いちばんいやなのは、レントゲンがきんご
「まっすっ立っつてきて」「うごかなごうごう」
「もんへんはっから言っ」
「私はこの牛でももんへんはっから言っ」
「あなたはレントゲンんきんごうしてごめんのこ
私のからだをよくんあいがわからぬので
でも今はこれをもってからだじゅうおかしなところが
たんとできたのでいちぢおこっていられない。
そればかりもいたみひきつったかおするよりもしわかおをもつて
しわしわにわらうきいて言っごうごうなすいた。

ふらふらやっつけて 詩を書いて去っていった

あつまさんが 書いた詩

人間とは何か
自分のためにいきるか
人のために生きるか
二つの 一つ

詩4 講師：上田假奈代

2014年2月1日(土)
14:00~16:00 @西成市民館

▶ スタッフ記録より

身体をほぐしたあと、假奈代さんが小川の水を両手にすくったようにし、隣の人の掌にそっと注ぐ。順に隣の人に渡してゆく。いつも寡黙なSさんが帽子で水をうけて渡した時には、その予想外さに歓声が挙がる。みんなが春にやりたいことを話すと、あたたかな天気も手伝って春が思い浮かぶ。続いて、谷川俊太郎さんの『耳をすます』をみんなで数行ずつ朗読。隣の人に本を渡すこと、声の大小、笑い声、さまざまなものが絶妙のテンポ感を持って奇跡のように絡みあう。初めての参加者は少なく、ほとんどがすでに詩の講座を受けたことがある方で、和気あいあいというか、やわらかなのだ。耕されていて、それぞれに愉しみ方を知っている。ペアをつくる時も、一緒に組んでみたい人を指名する人、率先して知らない人とペアを組んでくださるなど、とても積極的。この日は普段は朗読しないSさんが立って、横を向きながら朗読された。「三年間鬱だった」と何度も言って、「ここに表れている」と俳句を書き写した紙を何度も指差し、最後にその俳句を二度三度と朗読された。参加者の皆さんの声が、春のようにすこしぬるんだ空気に広がって、じんわりとして、皆さんいい顔で帰ってゆかれた。(か/ゆ)

地理1 講師：水内俊雄

2014年1月31日(金) 18:00~20:00
@太子会館老人憩の家

▶ スタッフ記録より

次回のまち歩きに向けて古い地図をよむ。①1835年。摂津国の地図。ココルームは摂津国東成郡天王寺村内ヶ墓。カマン!は摂津国西成郡今宮村東道。②は1の拡大図。広田神社を中心に、田んぼ、畑が大部分。③は江戸時代(1806年)。地図でお散歩、知っている地名を言い合い盛り上がる。④は1904年頃。木賃宿が長町から釜ヶ崎に移ってきた。釜ヶ崎は小字(こあざ)の地名。⑤は1907年ごろ。釜ヶ崎の中に大きなタバコ工場。ここが後の萩小に。⑥は1921年。木賃宿街が急速に発展。1929年に山王という地名が登場。⑦は1928年。最も古い航空写真の一つ。界筋の予定線。身近な地域の意外な歴史に息をのむ。(え)

▶ 受講生の感想より

- ・カマガサキ、やくしょ、くみんかん、ロシア人、明治40年天王寺内ヶ墓、ココルーム(S)
- ・この状態で行けば釜ヶ崎が小さくなり淋しくなるがその世に私は存在することは無いだろう。



ダンス部6 講師：中西ちさと

2014年1月27日(月) 14:00~16:00
@喜望の家

▶ スタッフ記録より

準備体操をし、それぞれのペースで部屋中を歩く。毎回しているようで皆さんの動きに慣れている空気。先生が「成果発表会に向けて練習してみませんか、じゃ、適当にペアになってください」と言うが自分たちでペアを作ることは難しい様子。初めてこのために練習するのかな?と見ていたが、動きに入ると、なんとまっぴっくり。ほとんど出来上がっていて、一人ひとりが個性溢れる何とも言えない動きをしている。笑ける。かわいい頭を出したり隠れたり、くるくる回って寝転んだり、パチンパチン手を鳴らして登場してきたり。笑える。(や)

ダンス部7 講師：中西ちさと

2014年2月3日(月) 14:00~16:00

@喜望の家

▶ スタッフ記録より

いつもの通りストレッチから。ちさとさんの動きを見てそれを真似る。発表の練習でははじまりと終わりの流れも合わせてつくる。由良さんの両手に石川くんがやさしく手をのせて動きを誘導。終わりは、全員がゆっくりまとまってゆくことになるが、ここでちょっと混乱、何度かやり方を変えて練習する。小休止ののち通し稽古をするが、Nくんが途中で動かなくなる!しばらく待ち、そのまま先に進める。もう一度最後にダンゴ状になるところのギュッと感を確認。「梅干しみたいに」と裕子さん。すると今までで一番よい状態に! Nくんの入るタイミングなどいくつか確認。深呼吸しておしまい。(え)



地理2 講師：水内俊雄

2014年2月10日(月) 14:00~16:00

@ココルーム集合のち街へ

▶ スタッフ記録より

1804年頃、1910年、1928年、1953年の地図を手にまちを歩く。ココルームを出て北へ。道楽亭の脇道は元ター心寺に続く道。左折してスパワールド、フェスゲ跡地はもと南海電車車庫、野戦病院、ロシア人捕虜収容所。その先は阪堺電車車庫跡地。向いの大きな空き地は中山太陽堂の工場跡。この辺りは開発が錯綜している。高架下には明治25年製のレンガ塀。その先が釜ヶ崎の木賃宿の発祥地。感慨深くあたりを見回す。明治37年か。大通りを渡り右手が元刑場。むかひの斜めの小道は鷹田墓へ。先へ進むとマッチの電光社址。左にすすむと天王寺村。右折した先は飛田新地。大正6年に誘致された。この地域の錯綜した歴史の片鱗にふれた。(え)

▶ 受講生の感想より

独特の歴史が交差しているのが伝わってきた。地図が古い町が生きているような気がする。ありがとうございました。(K)

合唱部5 講師：山本則幸

2014年2月12日(水) 18:30~20:30

@禁酒の館

▶ スタッフ記録より

ストレッチ、呼吸確認、発声練習からスタート。山本先生が体調を崩し声あまり出ないとのこと。身振りを大きく指導してくださる。体が楽器であるという意識をもとう、みんなで呼吸を合わせよう、といった声かけが印象的。これまで歌った曲を順番に歌い、発表会で歌う3曲を決める。皆さんどうしても楽譜ばかり見てしまい、指揮を見ながら歌うことがなかなか難しそう。『アメイジンググレイス』では、場の温度も高まり、皆さん集中して、一番伸びやかな声が聞こえた。1番~4番までそれぞれの歌詞のイメージを先生が説明すると、歌声が変わった。イメージの大切さに気づく。(み)



成果発表会

講師ゲスト：尾久土正己 / 中西ちさと / 野村誠
山本則幸 / 上田假奈代 [飛び入り] 砂連尾理
2014年2月16日(日) 14:00~17:10 @山王集会所

タイムテーブル

14:00~ はじめに 釜ヶ崎芸術大学ドキュメント映像
14:15~ 【音楽】釜芸オーケストラの演奏
14:35~ 【狂言】釜ヶ崎狂言会の公演映像上映
15:10~ 【合唱部】埴生の宿、花は咲く、アメイジンググレイス
15:30~ 休憩
15:45~ 【ダンス部】朝起きて
16:05~ 【写真】スライドショー、釜芸ガムランの音とともに
16:15~ 【詩】釜芸詩人たちの朗読
16:40~ みんなで話す 釜芸どうだった？
17:30 終了

▶ スタッフ記録より

会場は小さな舞台のある山王集会所。朝からみんなで展示やリハーサルを行なう。13時半には会場いっぱいのお客さん。まずは釜芸のドキュメント映像を鑑賞。ステージは釜芸オーケストラの演奏で幕をあける。指揮に合わせてコップや声、体で音を出す。途中、ダンサーの砂連尾理さんも飛び入りして、色々な人を誘って踊り出す。心地よい音があり、合図を勘違いして音楽が終わらずおかしい。続く狂言は、映像ながらも会場中で大笑い。出演者たちに拍手を贈る。合唱部ではばらばらなのに何か説得力のある歌声が響く。休憩後、静けさのなかではじまったのはダンス。それぞれの日常から生まれた動きを読み解くかのように見入る人たち。写真のスライドショーに続き、詩の朗読。それぞれの声、それぞれの物語に耳をすます。目を閉じて聞く人も。最後に何重もの円になって、釜芸についてみんなで話を。途中、大量のお菓子の差入れも！（ゆ）

▶ 受講生の感想より

- ・前に立たれた方々は、飾らず素の自分で表現され感動しました。
- ・子どもの足音とか、聴いている人たちのうなずきとか、もれる声とか、おやつを食べて空気が変わるところとか、すばらしかったです。
- ・みなさまがそこはかどなく晴れ晴れとした感じだったのが素敵でした。
- ・音楽演奏、狂言、合唱等すべて完璧な「自然体」が大変すばらしく感動し、大笑いさせていただきました。
- ・お互いを尊重されている態度、意欲、多くの方との出会いがうれしかったです。
- ・合唱、感動しました！！音楽って技術じゃないんだって始めて気付きました。埴生の宿、なぜか泣けてきました。こんなに心に打つ音楽は久しぶりでした。（O）
- ・一年目よりも二年目でちょっと心もゆるくなり、挨拶などかわせるようになった。嬉しい。娘も釜ヶ崎に行ける日を楽しみに待っている。（K）



『何度でも悩んで間違えて、何度でも青春で生きる』

寒い日が続きますが、みなさんお元気でしょうか。釜芸第二期ももうすぐ終業ですね。今年も成果発表会をひらくとのこと、参加できないのが残念です。今年は一度も行けなかったなあ。どの授業も気になったけど、なんといっても狂言がたまらなく見たかったです。あのおじさんたちが狂言って、そんなのありかよ！現代社会の浪人が演ずる古典芸能…。演劇人の僕としては、そんなことやられたらお手上げって感じです。

僕が釜ヶ崎で暮らしたのはココルームのスタッフをした一年間だけですが、その最初のほうに一年目の釜芸があったことはとても大きかったと思います。短い時間の中で、参加する人が変わっていくのを見ました。声や表情の感じが柔らかくなっていったり、より個人的なことを話すようになったり、相手の話を穏やかに聞くようになったり。

クラスメートが変わっていくなかで、僕もいろいろな感情と向き合うことになりました。初めて見る表情に戸惑って、うまく応じることができなかつたり、そんなとき何と言えばよかったのか、何も言わなくてよかったのか、ぐるぐると考えることばかりでした。

新鮮な出会いと小さな悩みの連続…。釜ヶ崎の人たちにとっても、よそから来る人たちにとっても、僕にとっても、あの時間は青春のようなものだったんじゃないかと思います。

いま暮らしている尾道は漁師町だからなのか自由な気風があり、移住やUターンでやってきた若者が空き家を改修して住んだりお店を開いたり、なかなか賑やかです。僕も本屋を始めようと準備中ですが、身体を壊したこともあって、のんびりとやっています。今までと比べると隠居のような生活ですが、ようやく青春を終えて、自分の仕事に自分のペースで取り組む時期が来たのかなと思っています。

この2月で31歳になりました。だいたい大阪や東京で会ったいろいろな分野の先輩方の経歴を見ても、30歳でようやく方向が定まって40歳でどうにか形になるというのが大筋のようだし、釜ヶ崎のおじさんたちなんて60歳近くになってから迎えた釜芸が青春だったりするわけなので

(これは想像だけど)、本当に、遅いも早いもないのだろうと思います。

こちらに来てからも、釜ヶ崎の空気をよく思い出します。誰でもそこにいることができる自由な空気。それは尾道の自由な感じとはずいぶん違うものです。

尾道の自由には、ある種の厳しさがあるように思います。自分のやり方でやるのはいいけど、常識の範囲内で。失敗したら自分の責任、あとは関知しない。海に飲まれたらそれまでよ、という感じでしょうか。ちょっと乱暴に言すぎかもしれないけど。

釜ヶ崎では、常識外れのやつがいて当然、問題が起きたらそのとき考える。失敗するやつもいて当然、みんなで助け合わないまでも、誰かが手を差し伸べる。だから誰でもいることができる。良いか悪いかは別にして、それは尾道の自由とはずいぶん違うし、他のまちでは滅多にありえない自由だと思います。

あの空気の中でもっと暮らしてみたかったという気持ちもあります。どうしてこのタイミングで他のまちに移ったのかと聞かれたら、うまく答えられません。そういう時だった、としか言いようがないのです。

ともかく移った、ちょっとだけ遠いまちで暮らす今も、釜ヶ崎では釜芸がひらかれている。そのことがとても嬉しいです。なんだか母校みたいだし、だけどまた入学もできるし、こう言うとひどく大きなようだけど、人間は自由で、いつでも勉強したり遊んだり出会ったりできるんだと思えるのです。

この先の暮らしがどうなっていくかさっぱりわからないけれど、あの空気を感じたことが僕の背骨のようになってくれるんじゃないかと思います。人生を転々としながら、いつだってどこだってあの空気を感じながら、新しく次の一步を踏み出していられたら、きっと何の問題もないのです。

成果発表会を終えたら、また報告書をつくるんですね？新しいクラスメートの様子をまとめて覗くのを、楽しみにしています。

茂木秀之 (2012-2013 ココルームスタッフ)

合唱部6 講師：山本則幸

2014年2月26日(水) 18:30~20:30

@禁酒の館

▶スタッフ記録より

成果発表会を終え、人数も減るのかと思いきや、発表を見て一緒に歌いたいと思ったという方が数名増えた！成果発表会の成果だ。歌う前に、発表会の際に渡せなかった方に賞状を渡すと拍手喝采で大盛り上がり。今日はじめての『町』という歌に挑戦するが、歌ってみると、音程も案外合い、声の厚みもありいい感じ！「あれ、めっちゃ上手いじゃないですか！」と先生。「褒め上手やね、先生」「誰かひとり上手いこと歌ってんのやろ」と参加者。合唱部も回を重ね、先生も参加者もお互いに慣れ、おかしなやりとりが飛び交い、みんなで笑う。アメイジンググレイスでは「恐れ知らぬおろかな旅人」の歌詞に「(僕らも) おろかな旅人の集団だからね」という声も。(ゆ)

「2人くらい気を抜いた人がいました」 「声はすべてイメージです！」
「先生おかし？」 「わかりました！」
あーあーあーあー

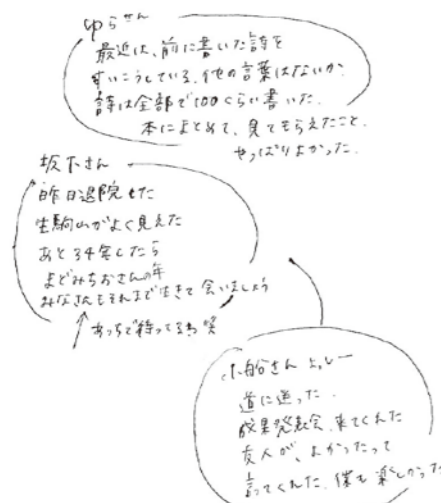


詩5 講師：上田假奈代

2014年3月1日(土) 14:00 ~ 16:00
@西成市民館

▶ スタッフ記録より

追加した授業ということもあり、釜ヶ崎地域内からの参加がほとんど。発表会后、授業の間隔が空いたこともあり、久々に会えたことに喜ぶ姿も。はじめに、假奈代さんが昨日104歳で亡くなったまどみちおさんの話をし、みんなでまどさんの詩を順に朗読してゆく。耳にやわらかい。近況報告では、昨日退院して来たこと、写真の講座以降写真を撮りまくっているということ、釜芸の時間を大切に思っていることなどが話される。詩のテーマは「地名」。みんなの人生を表すかのように、一人の人からさまざまな地名が書かれる。字の形、筆圧、文字数も、みな違う。インタビューは和気あいあいと行なわれるが、中には相手に質問をすることが難しい様子の人も。つくられた詩には、地名と云えど、架空の地名やら、足を踏み入れることのない地名やら、いろんな地名が読み込まれ、旅をしたかのような二時間。(ゆ)



日本国関西西県梅松市南花園区 あかんたれ通り4丁目10番地

話をした人 由良栄久
詩をつかった人 坂下範征

あかんたれ通り酔っぱらい筋
これは、由良さんの未来の 大阪市の見取図である
奈良も和歌山も京都も滋賀も 大阪、兵庫が関西西県になり
大阪市の名前は梅松市と大変更になる
何処梅松市と酒の松竹梅みたいな名前になるのだろうか
アル中ばかりのアカンタレばかりの南花園区

ナンバや西成も堺も泉大津もその区にはいるということである
ミドワ筋も堺筋もなくなり
アホの坂田下オリとか、ヤスキヨドリとか
オヤ不幸通りとかカンミドリとか
メチャクチャ詩的情緒のない名称になる
男はハーレムをつくり、女は女王蜂で男のどれい蜂をさっばさっば
毎日ヤンヤンヤ、ユラユラユラしながら
めしがたべられ、ミン汁とツケモノをたべられ、
結構至極の梅松市になると、
由良さんは詩をどんと書いて空想されている
ここは日本国関西西県梅松市南花園区
あかんたれ通り4丁目10番地です
まどみちおさん、わらわなうでください

住みやすくてやさしい街

話をした人 大坪広三
詩をつかった人 小舟吉之

宮崎から大阪に来た時
通天閣の大きさに驚いた
西成区萩之茶屋に住んで
早いもので三年になった
今の生きがいは
公園の掃除しながら
野菜をやること
さつまいも、玉ねぎ出来た！
楽しい
じゃがいもを植えた
今から収穫が楽しみ
西成区萩之茶屋は
住みやすくて、やさしい街です

大宇宙郡阿弥陀仏様 今後共宜しくお願いします

詩をつかった人 紫藤忠信

私は歩いたよ たくさんたたくさん歩いたよ
でもそれが なせか わからな
わからない それでいいんだよ
その迷いは 春の風に乗って 消えてゆくだろう
私はその言葉に納得したかのように 只 凝視するだけで
目玉の掟を只 破るだけだ
春の風はやがて過ぎゆき 消しゆへ

合唱部8 講師：山本則幸

2014年3月26日(水) 18:30 ~ 20:30
@禁酒の館

▶ スタッフ記録より

合唱の釜芸、最後の授業。前回に引き続き4月以降についての話をする。「続けていきたい」という声が出る。人前で歌うことにも挑戦できたらいい。8月まで、自分たちでお金を出し合って、月1回のペースで続けてみようということになる。今日は、これまでやってきた全部の歌を歌う。「町』では、「気分を出して歌って」と指示が入る。「気分ってどういうこと？」という声に、「この歌は、旅人、あちこちに行ってる人じゃないですか？」と先生。「ホームレスや！」とTさんが言う。そう思うと、この歌は路上生活者の視点からの歌のようにも読める。「フェルマータで伸ばす時に、他の人の声を聞いてみましょう」。気をつけるとだんだん揃ってくる。山本先生から「ぜひ、多くの人に聴いて欲しい合唱です」という言葉をいただく。(こ)



合唱部7 講師：山本則幸

2014年3月12日(水) 18:30 ~ 20:30
@禁酒の館

▶ スタッフ記録より

合唱部もあと2回。最初に、裕子さんから4月からの合唱部について話し合いたいという挨拶。「夢は海外遠征やな」「この前山王集会所でデビューしたな」という声。発声の練習では「自分の声が目と目の間から出るイメージ。遠くのお客さんにも届けるイメージです」と先生。季節にあわせ滝廉太郎作曲の『花』に挑戦。日本で初めての合唱曲とのことで、詩が文語のため、詩の解釈もする。細かく入っている強弱記号にも気をつけて歌う。二部合唱にも挑戦。「これはなかなか難しくできないうすばらしい」と先生からの言葉。「町』は夕張の町に思いを馳せて創作された曲。人の声を聞く。ピアノも聞く。聴き合うとひとつになる。(こ)

▶ 受講生の感想より

- ・このまま続けましょうさんせい致します。
- ・やりたいけど、今の状況では、むずかしいかも？
- ・4月以降、月に1回で¥500程でいかがですか。

思い出の桜、完成しない川柳

絵を描き話をした人 由良
詩をつくった人 吉之(ヨッシ)

30年ぶりに訪れた懐かしの小学校。今年も咲いた桜。思い出を懐かしんで桜をながめて川柳を作っていて「かっこいい」という言葉をつなげるものが何なのか？考えていると何かがかんで来そうだがでも宇宙の大きさに負けてわからなくなってきた。咲き乱れる桜がまだ言葉を待つられなくて良いんだと言っているように舞い散った今はゆっくり桜を見よう

空のむこうから

絵を描き話をした人 吉之(ヨッシ)
詩をつくった人 由良

私は今宇宙のどまん中にいる。人口衛星に乗っている。天文学のすきな宇宙飛行士である地球をみると年おいた母親がおもいがかぶあふるさとのさへらのきせつに帰りたい気持ちはあるけれどまだ帰れないふるさは川がながれて柳があってほっとするけしきが見えてくるまわりの星たちは光りかがやく今の私はせつない思い、早く地球に帰って母といっしょに桜の花見をして母の好きな川柳を二人で作りたいと思うと涙が出てきちゃった。無事に人工衛星の仕事が終るのを祈って母にメールで自分の川柳を送ることにしよう。いつまでも元気であってくれと思うこのころである

十九の光

話をした人 亀谷長孝
詩をつくった人 今滝憲雄

「わたしが人工衛星に出合ったのは、ちょうど十九の頃でした。今更証と言われても、元の十九に戻してよ…」今日も一日無事に仕事を終えられますように。ご先祖様へのお祈りに始まる未明からの仕事。ボイラーの仕事を始める為、当時、相棒を呼びに出かけたその帰路、朝の四時頃突如あらわれた謎の光る物体。ガジュマルの木の下で息を飲み腰を抜かさんばかりの驚きに俺と相棒は二人立ちすくんだ。翌朝の「沖縄タイムス」読谷町・ムービーチ石川市でも目撃情報が寄せられていた時は一九六四年頃、ケネディ暗殺時の出来事に象徴される時代。ちようこうさんの沖縄での明確な記憶。重いを馳せるその瞳に、少し哀愁がただよっていた

さへらの花

話をした人 河本
詩をつくった人 大坪

花みはきせつになると自転車であてています。中ノ島の川口さへらがいちばんきれいです。だと思えます。そらを見あげることはない。大阪のそらはあまりみない。お星さんへらいます。さへらさへらさへら。花のきせつです



詩6 講師：上田假奈代

2014年3月29日(土) 14:00 ~ 16:00

@西成市民館

▶スタッフ記録より

窓を開けると春の陽気で、部屋も明るい。子どもも傍らで遊んでいる。近況報告をしたあと、假奈代さんが詩集のなかから一人ひとりの参加者のために選んでくれた詩を朗読。詩をつくるテーマを出すと「桜・人工衛星・川柳」と、組み合わせるのが難しそうな言葉たちが出て来るが、これまで詩の時間を重ねて来たからやってみましょう、と、このテーマでつくってみることに。ペアになり、お互いの話を聞いて詩をつくる。假奈代さんとペアになったTさんは話すことは次から次へと出て来るが、質問の仕方がわからないことを自覚的に語る。9月からの授業を経て、人と会話をする方法について、やっとTさんと話すことができた。皆さん、見事にテーマが織り込まれた作品を朗読。終わりに、みんなで釜芸の旗を持って記念撮影。釜芸第二期のいったん最後の授業を終える。(ゆ)

釜芸文集

釜ヶ崎芸術大学に通った学生や講師のみなさんに、釜芸で学び感じたことを言葉にいただきました。



我以外皆我師也

我輩は生活保護受給者である。名前はアル。表札に名前を書く人は誰もいない福祉アパートの住民である。メルヘン生活といえばメルヘン。病気にかかっても面倒をみてくれる。それに大学も無料である。余裕のある時は百円か二百円カンパボックスにいれる。名前は釜ヶ崎芸術大学という、カマとゲイというとりあわせの何ともいえず不思議で面白い大学である。ホームレスの人達はたまに来て、ほとんどいない。あいりん地区以外からの人達、あいりん地区で年金生活している人達、そして生活保護受給者の人達が気のむいた時に教室に足を運んでいる。第二期の谷川俊太郎さんの『釜芸に寄せて』という詩にある「笑いと涙もごちゃまぜの釜大汁」を炊き出しでしたら、教室にはいりきれないほどいっぱいの人になり、世界一出席率の高い大学になるだろう。

私は五年ほど前、NPO 釜ヶ崎支援機構のHさんという人にアル中の疑いがあるといわれ、医療センターで頭のCTスキャンの結果、アルコール依存症脳萎縮と診断され、小杉クリニック精神科の通院とミーティングが始まることになった。病院から天王寺公園、ジャンジャン横丁、そして動物園前商店街を歩くと、ココルームやカマン！メディアセンターにぶつかった。和服姿の乙女Uさんにわたしてもらったのが、釜芸大の前身ワークショップ「まちでつながる」の案内パンフ。ココルーム主催の2012年度「表現のワークショップ」全九回にすべて出席し、楽しい思い出をもらった。

初めの三回はジャワ舞踊ダンサーの佐久間新さん。何か強烈なインパクトを体の動きで表現されている。みんなであいりんの街を歩いたのが今でもあざやかによみがえる。三回目の4月12日のことだ。

二番バッターは岩橋由莉さん。「出会いを楽しむ」では自己紹介や「今までみた映画」ということで、人力車夫の板妻が雪の中で倒れているシーン。部屋の中の女の酒の宣伝ポスター。チャップリンの「街の灯」などについてしゃべりだす。紫尾山の麓にある紫映館。二回目には岩橋先生が一時間ほど遅刻されたので、ココルームスタッフの植田裕子さんが先生になり、雨の日の話になり、「Singing in the rain」の映画の話になる。そのあと事故もなく岩橋由莉さんがあらわれたのでほっとした。三回目は小生の五才の時の初恋の思い出を四、五名で寸劇にしてみらえて、思い出を訂正してもらおう。一期一会という言葉は美しい。

三番バッターはココルーム代表の上田假奈代さん。詩を活字にしたことのないような参加者に、生き生きとした詩をつくらせるマジシャンの如き詩人である。おっちゃんたちと詩をつくる、おっちゃんたちが朗読する、すばらしいワーク

ショップ。8月9日、何分間か相手のうら若き女性をじっとみつめてつくらせてもらった『ある肖像画家のつぶやき』。二回目、若い青年から思い出の場所をきいて作った詩『六甲の夜景』。三回目、10月11日大学生の東京の坂口さんにアルコール依存症の処方箋を詩につくってくださいとたのむと、

ピカピカかがやく宇宙の星が 冷えていった しぼんでいった
ひとつを指で弾いてみる パーンとぶつかった
もうひとつ弾いてみる パーンパーンとぶつかって
とんでいった破片が もうひとつおまけでパーン
ドカーン ドカーン ドカーン

という詩をつくってくれた。君からきかせてもらった『まゆげのおじさん』に東京オリンピックまでがんばってとお伝えください。以上が計18時間のワークショップのほんのひとこまです。

自分が生活保護者であるという負い目、アル中、ギャンブル中毒で人生をズタズタにした罪人という自尊心の消滅。しかし何はともあれ人間の尊厳は誰しも保有されるべきものだと、あたたかな出席者の人達、やさしい心のスタッフの人達、協力された三徳寮の職員の人達に出会い、感じました。絆のない孤独ほど人の心をむしばむものはありません。何かを表現したいという人の心ほど大切にしなければならぬものはありません。この九回のワークショップそのものの魅力がひきつがれ、釜ヶ崎芸術大学が世界のどこにもない「学びたい人が集まれば、そこが大学になる」と第一期釜芸のパンフの文章にあるように、ほんものの大学につながってゆくことを期待しております。

私の尊敬する吉川英治先生の言葉に「我以外皆我師也」という言葉があります。みんなが先生であるということ。ある人は我より先に生まれ、ある人は我より先まで生きるということ。

釜ヶ崎芸術大学で、生まれてはじめて大阪九阜会館で「カッパ」という狂言をやらせてもらったり、ガムランでドラをたたかせてもらったり、お笑いで「マンザイ」やらせてもらったり、天文学でハリマ天文台の話のスライドで説明してもらったり、芸術の授業で10分間先生にならせてもらったり。このアイリンという私の一番好きな土地で、70才になった。「冥土の土産」をいっぱいつくって、あの世とやらへむかうじゅんぴを、お米のめしとおいしいみそ汁をたべさせてもらいながら、していきたい。三期の開校を祈りつつ。今は酒もタバコもやめて何度目かの人生の道を歩んでいるつもりです。

前身のワークショップと

「釜ヶ崎芸術大学」に参加して

坂下範征 (釜芸大・学籍番号3番)

新幹線が大阪駅に近づく。自分は、大阪がニガテだった、ということ減速する新幹線と共に思い出す。モロッコの旅があまりにすばらしく以後、あれよりすばらしい旅はどこにもありえない、と、しばし「旅恐怖症」に陥る。ところがその思い込みは釜ヶ崎でいともかんたんにくつがえされる。

初日は岩橋由莉先生による「表現」。かねてより、岩橋さんのワーク、いいよぉ…!と友人が絶賛しつづけていたので、いつか参加したいと願ひ続けてきた。噂にたがわぬユニークで力強い、受容と集中のファシリテート。場にすべてをゆだね、沈黙もまた表現であることを前提に進む。ひとりひとりの存在感とことばの重みが、ずしり、と内臓にのしかかる。

参加者はとつとつと語る。空虚感。釜ヶ崎の労働者でありつつ、同時にこの労働者に対して持っている差別意識。母親のこと。競馬のこと。哲学のこと。

ふとヨイトマケの歌が頭にうかぶ。そのとたん、シンクロするように「ヨイトマケの唄が、去年の紅白で話題になりましたが、最後、あそこはエンジニアではなく、あいりん地区の労働者、ではどうか、そうしたらもっとよくなるとおもうんですよ」というカバー(?)案が飛び出す。そこにもまた意見がとびかう。『『あいりん』で、行政のつくったことばだろ』『いや、それはそれとして、『あいりんはブラックホールかオアシスか』という短歌を作ったことがあるんですけど…』と語る人。

小休止の時間。キラキラした瞳で、ここに来た理由を語る。「以前からいっぺん大学ってどこに行ってみたかったですわ。そしたら朝日新聞に紹介記事、みつけてな、すぐにこれや!おもて、切り抜いて、新聞社に電話しましたんや」平均年齢 68~69 歳と推定する。高齢化がすすむ街で、今、学ぼう、学びたい、と思い、行動する人たちがいる。はさみを手に、新聞を切り抜く姿を思う。

野村誠先生による「音楽」。多くの方は、野村さんとの音楽づくりを、去年体験済み。今年は前々から出していた「五線譜を読めるようになりたい」というリクエストに応えることになる。面白くもないはずの楽譜の読み方を、野村さんらしく、理にかないつつ、わかりやすく教える。いつも、こんなふう面白く話しているのか、という疑問が浮かぶ。「僕もあんまり五線譜の読み方とか教えたことないんでー」。教えたことがないのに、このクオリティである。ここで教えられたのは五線譜の読み方だけでなく、自分が本当に腑に落ちていることのもつ、強さ、である。

上田假奈代先生による、「詩」の授業がある。ペアになって、テーマに沿ったおしゃべりをして、そこから聞き取ったことを詩にしていく。人の話を聞く練習でも

ある。今日のテーマは「誰かを思い浮かべて、その人について話をする」。夏に、アパートの一室で亡くなっていた、という方の写真が飾られている。

私の話を聞いてくれた T さんが、すてきな詩を作ってくれた。「理解ある友達」という詩。

観光ではなく、釜ヶ崎のことが知りたくて

釜ヶ崎にやってきた

釜ヶ崎にくることに

友人が理解を示す

(私は、理解ということばがもともと好きではないし、一度も話に使っていないのに、のっけから、理解、ということばがでてきて、びっくりする。しだいに、理解の使い方とは、こういうものなのだ、とびっくりしながら、理解する)

今の日本、どこへ行っても

画一化されている

釜ヶ崎は、大阪らしさが残る街

(そんなこと、ひとことも言っていないのに、またまた、びっくりする。T さんの朗読を聞きながら、気がつく、涙が頬を伝っている。「自分のした話」に涙するって、これいかに?とつっこみながら、T さんの詩を書き写す) つい昨日まで、誰かと詩をつくる、なんて考えたこともなく、ましてや釜ヶ崎のおっちゃんを詩を作るなんて夢にも思わなかった。どちらかといえば、自分にはあまり関わりのない人たちだろうと思ってしまっていた。でも釜ヶ崎芸術大学のおかげで、安心・安全な場で、一緒に表現すること、音をだすこと、詩をつくること、そんなことができるんだとわかった。そこでは才能も努力も必要なく、ただ学びたいと願ひ、その意思を表せば、かたちになる。

〈数時間のワークで何がわかる。私がみたのは上澄みに過ぎない。〉そんな声、自分の中に響く。けれど、学びと、ことばと、存在の原点が交錯する場に、何かがある。多くの挫折や、傷や痛みがひりひりとにじむ。

学長の上田假奈代さんは、釜ヶ崎に住み、釜ヶ崎のど真ん中でカフェを営みながらそれでいて「大阪がニガテで〜」と笑う。そもそも日本がニガテな私は、居場所のなさにかけては第一人者ですが、と上田さんにそっと名乗ってみる。

いただいた資料を振り返る。平田オリザ×谷川俊太郎×栗原彬の鼎談がある。そう、ここで行われていることは、釜ヶ崎だけに必要なことじゃない。こういう学びを必要としない場所が、あるだろうか。ひとの話をきくこと。ひょうげんすること。シンプルなのに、ただただ難しい。そして、ほんとうは、たのしいこと。

釜ヶ崎芸大における世士、私としての感想

世士 (釜芸大・学籍番号 2 番)

(玉置は省略。本当は栗本ですから、いつの間にかに居候に変えられた名字、玉置は名乗りたくない)

第二期釜ヶ崎芸大、特殊な環境の土地。大阪のダウンタウン、人生に絶望して、酒におぼれ、博打におぼれ、借金まみれてこの地に来た人たち。そしてあらゆる場所から弾き出された劣等感いっばいの人たち。一番の底辺を知っている人たち。色々な苦しみを知っている。色々な理由が有り、学校に行けなかった人、行かなかった人、孤独の集団である釜ヶ崎で、芸大として、色々な人が集まる。ただ集まるだけでなく教養もつく。今回で二回目、60 の講義、何一つとってても適当で無く、すべて真剣に接するに足りる釜芸。学校法人では無いが、学校法人でないから、誰でもどのような方でも、わけありの方々でも、参加が出来る。

講師陣も型に入りきらない人ばかりで、17 人以上の、個性的な人ばかりであった。たった 5 日間で、童司先生と日本の古典芸能狂言をなんとかこなし、山本則幸先生の合唱もよい線を行きつつある。表現の岩橋先生、美人であり、独特の表現方法を探し出す。上田詩人も、合作詩の道を作った独自性が非常におもしろい。不思議と人と合作でもまとまる詩。お笑いの授業、たった 3 回だけで終わったが、かなりの出来だった。天文学は、尾久土先生が和歌山の遠くから、重い貴重な機材を持って来てくださり、有りがたき授業。釜芸二回目で一番の参加生徒数を誇る、森村先生に高山明先生。非常に特殊な美術感覚。見事の一言では終わらない。後を引く。中西先生の授業は、私は一度も参加していなかったが、発表会の席で接して、独自性のある振付のダンス。1 日の個々の人々の生活の動きをダンスとしてとらえる発想。一つの哲学としての考え・宗教がある。人それぞれ加齢す

ることに哲学を考える。西川勝先生の精神病院の看護師としての話。私も、精神病院の看護側としてではなく、患者側として、体験したことを多少話した。残念ながら哲学は 2 回しか講義が無かったから、あまり話せなかった。本宮氷先生の絵画。こちらも残念ながら人物の顔の描き方の基本だけしか参加していなかった。

私が絵に力を入れたのは、片想いの娘が私を多少でも注目して欲しかったから。小学校 6 年間でたった 2 回しか出品していませんが、小学低学年の時は彦根城、上級生の時は金閣寺を描いた。どちらも展覧会に出品されていた。いまだに私の所に戻って来ていない。でも別に未練はない。なぜか片想いの娘にあまり関心を示してもらえなかったから。中学 3 年の最後に、同窓同志の似顔絵の描き合いをした時に、その片想いの娘が「今度は私の似顔絵を描いて」と言った。待ってましたと思うほど嬉しかったが、口ごもり返事ができなかった。その娘がいない今、あまり絵に熱中出来るか「?」だ。でも、先生の絵画の情熱が感じ取れて、私もゼロから絵画に興味を持つとか迷走中。私の父は、絵画では「竜胆」、書道では「卓明」の名を、絵画と書道の先生からもらっているほど才能があった。滋賀の彦根城の大きな看板を書いたのも私の父。その看板を元にして、もう何回も上書きされていると思うが、身勝手な父を私はあまり好きではない。その血が流れているから、私にも多少の才能があったように思う。中学卒業と同時に、一切の絵は描いていなかった。残りの人生、少しでも作品を残そうかと思案中。でも何か、カーッと燃えるような絵の情熱、中学卒業と同時にその娘と離れて、またその娘が、昭和 45 年 3 月に結婚してから、一度も絵を描こうと考える情熱が持てないのも事実です。昭和 45 年、私の満 21 才から生に対して建設的な考え方はなくなったのも事実です。21 才に死に損ない、今まで 65 才までの 44 年間、惰性で生きている。

独りで居ると、生について考えすぎ、死を迎えようと思ってしまうから、釜芸に参加するようになった。釜芸が終わった今は参加していなくても、捨てられた猫二匹を飼っているから、この猫二匹を見捨てることが出来ないから生きている。この二匹が病気等で死ぬことになればたぶん…。どこに行っても誰からも好かれることのない私。身内からも好かれていない。なぜか?どこに行っても疎外感、私についてくる。今はベトナムで死んでいった戦友たちが、私が死を考えると私の夢に出て来て叱るから、仕方がなく生きている。生きていける糧にしたい釜ヶ崎芸術大学。

釜ヶ崎芸術大学へ行く

横田和子 (釜芸大・学籍番号 12 番)

朝日新聞関西スクエア 2013年11月号から抜粋

釜芸2年目、 笑って熱烈開講中

日雇い労働者の街に根を張り、学び合い

黒沢雅善（朝日新聞記者／釜芸大・学籍番号 45 番）

混沌コミュニケーション基地

普通の喫茶店ではない。レストランでもない。酒場でも、雑貨店でも、ギャラリー、私設図書館、事務所、談話室、休憩所、作業所、よろず相談所…どれもでもない。と同時に、そのすべてを兼ねている。混沌という形容がぴったりくる。上田さんとココルームのスタッフが活動の拠点にしている「カフェ ココルーム」は、既成の常識的な分類があてはまらない、何とも不思議な空間だ。

入り口に「Infoshop Cafe & Bar」と一応書いてある。カウンターと客席らしい椅子はある。注文すれば食事ができる。お茶もビールも酒も飲める。しかし、何も頼まないで座っていても、一向に追い出されない。

白熱灯のスポット照明がともる、ほの暗い室内。壁一面の棚に、本や資料がぎっしり並ぶ。その隣の掲示板に、催し物の開催を知らせるチラシや連絡書類が、すき間なくぶら下がる。天井には、釜ヶ崎の人たちが墨で書いたという習字や漫画が無造作に貼ってある。

奥に三畳ほどの広さの畳の間がある。大きな座卓が鎮座している。スタッフと手伝いに来てくれた人たちが、思い思いにノート・パソコンや文房具を広げて仕事をする。昼と夜には、みんながそろって食事するちゃぶ台に早変わりする。

表へ出ると、軒に極彩色の手書き看板。ドアも極彩色。壁にはポスターとビラが満艦飾。さらに、通りの向かい側には、同じくココルームが運営する「カマン!メディアセンター」がある。中古の洋服、かばん、バッグ、食器、おもちゃ、レコード、CDなどが、軒先までところ狭しと並ぶ。売って活動資金を工面するため、活動を応援する人たちが寄付してくれた品々だ。

地下鉄を動物園前駅で下りてすぐ。東側の出口から南へ、「動物園前一番街」と書かれた看板がかかるアーケード街へ入る。100mほど歩けば、カフェ ココルームとカマン!メディアセンターだ。

ド派手な色使いが、嫌でも目に飛び込む。ひっそりした周囲から浮き立って明るい。初めて来る人でもすぐわかる。さらに通りを進んだ左側は、旧飛

田遊郭。逆に右へ折れて少し行けば、労働者向けの簡易宿所が並ぶドヤ街。場所といい、外観といい、釜ヶ崎の入り口に立って光を投げかける灯台といった趣だ。

ドアはいつも開いている。上田さんらは、ここで釜ヶ崎の人々を分け隔てなく迎え、訪れるお客さん、手伝いに来てくれるボランティアの人々に応対する。そしてさまざまな「仕込み」をして、釜ヶ崎の各地へ散ってゆく。もちろん、釜芸の事務局にもなっている。まさに、コミュニケーションの最前線基地なのだ。

オッチャンに先生してほしい

もちろん、ココルームの活動範囲は、釜芸だけにとどまらない。今夏以降に主催、協力した行事は、ざっと拾っただけでも、次のようなものがある。

リラックス体操と瞑想の会／釜芸自主ゼミ*推薦図書を読む!／初心者向け日本舞踊教室／えんがわ健康相談会／釜ヶ崎ねぶたをつくる!／台湾の鳳甲美術館での展覧会「逆棲」に参加／えんがわおしゃべり相談会／ことばを楽しむワークショップ／『泥の河』の上映とまっちゃんのはなしを聴く会／釜ヶ崎夏祭り習字を書くコーナー／釜ヶ崎氷志句会／大阪メディフェス 2013～メディアを捨てて、メディアになろう～釜ヶ崎まちあるき編

本会報で内容を紹介することは、とてもできそうにない。詳しくは、ココルームのホームページ <http://www.cocoroom.org> を見ていただきたい。釜芸の昨年度と今年度の活動報告も載っている。

上田さんが釜ヶ崎の隣の新世界に最初のココルームを開いたのが 2003 年。10 年間におよぶ地道な活動の積み重ねは、今や地域にしっかり根を張り、溶け込んでいる。

しかし、なぜそこまで釜ヶ崎にこだわり、釜芸に打ち込むのだろうか。取材の最後に改めて尋ねた。上田さんから、次のような言葉が返ってきた。

「戦後の日本は、戦争の総括をきちんとしてこなかったように思います。高

度経済成長の方を向いて、落としてきたことが、たくさんあるんじゃないでしょうか。原発の問題がそうでしょうし、芸術も文化も踏み込んできませんでした。そう言う私自身、若い頃から違和感を感じつつも、快適な暮らしを手放せないでいました」

「そんな成長社会を底辺で支えてきたのが、この街なんですよ、それなのに『怖いから行ってはいけない』なんて言われる。おかしいです。結論は出ないかもしれないけれど、私は、ここにいたい。ここから考えたい。ここに生きている 1 人 1 人の人生を見て、聞いて、立ち会いたいと思いました。さらに、そんな人たちが自ら『表現』したらいいのになと思って、いろいろな活動を始めました」

「釜芸を始めて 1 年。学生として来てくれてるオッチャンたちは、予想していたけれど、やはり、すごい能力と可能性を秘めていました。釜芸の目指すところは、オッチャンたち自身が先生になって、マネジメントもしてくれたいなどと、今は真剣に考えています」

ココルームは上田さんと、植田裕子さん、小手川望さん、山口諒子さん、遠藤智昭さんの 4 人のスタッフで運営している。釜芸をはじめとする催しのプロデュース、店の切り盛り、ホームページの作成・管理、協力者や支援団体との折衝…と膨大な仕事をこなす。誠実な働きぶりがとてもまぶしく、ミュージック・ギリシャ、ローマ神話に出てくる芸術の女神たちのように映る（男性もいるけれど、目をつぶらせていただく）。

上田さんからメールをいただいた。「地域外の方には、釜芸で学んで、ご自身の人生や地域にいかしてもらえたらありがたい」。また、「釜ヶ崎とは実は、この地域ではなく、いわく語りがたい状況のことかもしれないですね」とも。再読三読し、新たに出された宿題に、まる一日、考え込んでしまった。しかし、女神たちのほほえみに触れた以上、もう逃げるわけにはいきまい。じっくり取り組ませてもらいたい。

やっぱりやってよかった。

計画段階から、ガムランという音楽と釜ヶ崎という土地はうまくマッチするだろうと思っていたところ、やはりそうだった。2日間の授業でのシーンを追いかけてながら、なぜマッチするのかを語ってみたい。

1回目の授業では、きわめてオーソドックスに、ジャワの曲をひとつ、みんなでさらうことにした。ガムランには指揮者のような人がいなく、皆が聴き合っで演奏を進めてゆく。もともと気心のしれた村の人たちの集まりで演奏されるから可能なのだ。その音楽は村人の気晴らしや娯楽であったり、ときには村の災いを追い払うためのシリアスなものにもなったりする。要するに、ガムラン音楽はインドネシアではコミュニティのための音楽、すなわちコミュニティ・ミュージックとして機能している。

そして、釜ヶ崎芸大の1日目の授業で、「皆さん、こんにちは」と言ったときの、皆さんの返事。バラバラだけれど、心からの「こんにちは」が返ってきたとき、これは！とっても面白くなるかもとゾクゾクとしたものです。そう、そこには既に釜ヶ崎という色濃いコミュニティの空気が醸し出され、この空気感がガムランという楽器に出会ったら、どんなことになるのだろう、という感じが噴出していた。実は、僕はこれまで、それこそいっぱいガムラン音楽のワークショップを小学生から大人までやってきたけれど、ま、そこその結果はでるんですよ。でも、ガムランがコミュニティ・ミュージックであるなら、ワークショップのコミュニティに何かが起こらないのが気にかかっていた。ひょっとしたら、それが打ち破られ、いままで体験したことのないワークショップになるかもしれないと釜ヶ崎で予感した。まあ、受講生にとっては、いずれにせよ、いままで体験したことのない時間を過ごすことに変わりはないのだけれど。

練習したのはトロンボンバンという初歩的な曲。ワンコーラスを演奏するのに、およそ30秒。楽譜は数字ですよといっても、ああそうですかという感じで、皆さん黙々と楽しげに取り組む。ちょっとやそっとのことで驚かない人たちだから。集まった十数人は、確かに不器用だけれど必死についてきてくれた。1時間ほど経った頃、音楽は淀みなく流れ出した。ガムランの特徴は、延々とメロディを繰り返すことだ。終わりまでいったら、また初めに戻る。鉄道唱歌って、確か数十番まであったけれど、そんな感じで歌なしに延々と繰り返す。それはいつしかトランスというか、ランナーズハイみたいになって止まらなくなる。

外で上田假奈代さんの気配がしたので出てみる。会場の太子老人憩の家の中から、道の方へふんわりとガムランの音が漂っている。「いい感じやね、釜ヶ崎ガムラン村」と假奈代さん。曲はぐるぐる廻っている。部屋に戻ると、なんと皆が楽しそうに演奏していることか。誰かが間違ったら、次にその箇所が近づいてくると、全員がその人に向け声や手や指などで合図して、間違わないようサポートする。無事通り過ぎると笑顔だ。ガムランはコミュニティ・ミュージック！ここにはまさにそんな音があった。確かに完璧には揃っていないけれど、極上の音楽だった。ちょっと大げさかもしれないけれど、音のちょっとしたズレや隙間から、皆の「思いやり」「助け合い」「お節介」などといった釜ヶ崎の人々の素敵な息づかいが、ポンポンきこえてきたのだ。この良さ、世間の音楽好きに分かってほしいなとつくづく思った。皆に感謝した。授業じゃなく、授業でしたね。

さて、2回目の授業では…。あれれ、この原稿1000字という約束だったのに、もう1500字になっている。じゃ、ここで突如、筆をおく。これも釜ヶ崎芸大。

結論。ガムラン授業は平成26年度のカリキュラムにも載ると思います。

中川真（釜芸大「ガムラン」講師）

アートになる

釜ヶ崎では天文学も

私が釜ヶ崎で天文学の講義をしたり、望遠鏡を持ってきて観望会をしたりするようになったのは2009年の暮れからだ。その年の夏に上田假奈代さんと出会い、まずは一度天文学の話をと、12/19「クリスマスに星空を見上げて〜釜ヶ崎から宇宙へ」という演題で釜ヶ崎デビューした。私たちが空を見上げたとき、そこに見える星々はすべて過去の光になる。例えば、織姫星は25年前の光である。となると、釜ヶ崎のおじさんたちの思い出の時代の光が夜空に輝いていることになる。早速、裏路地に出て、おじさんたちと空を見上げると、当たり前なことだが、宇宙はどこでも平等にその空の上に広がっていた。そんなことを感じた瞬間、発作的に「年末に望遠鏡を持ってくるので、三角公園でお月さんを見ましよう！」と天体観望会を提案した。

最初の観望会は12/29、2台の望遠鏡を三角公園に持ち込んだ。「お前はどこのもんで、何をしに来たんや？」と怖そうな顔で話しかけてきたおじさんは、望遠鏡を覗いた瞬間、「これ本物か？」「うさぎおるんか？」と目が少年のようになっていた。また、病気で視力が落ちていて、なかなか見ることができずにいたおじさんの顔を手で持って、接眼部が目の正面にくるようサポートしてあげると、「ええもん、見させてもらったわ」と喜んでくれた。そのうち、見終えたはずのおじさんが別のおじさんを連れて戻ってきて、「おい、これを見てみ！デコポコがたくさん見えるやろ？」と解説をしてくれた。列を整理してくれたりと、あっと言う間に公共の天文台で行われているような観望会が出来上がってしまった。

私たち天文屋は普段、市民や子供の前で講義をしたり、望遠鏡で天体を見せたりする際、口に出さなくても、どこかに「天文好きを増やして、将来の研究費の獲得につなげたい」とか「子どもたちが未来の天文学者になるきっかけになれば」などと自分たちの業界からの視点で接している。ところが、釜ヶ崎で宇宙の話をして、星を見せても、それで研究費が増えるわけもないし、ましてやおじさんたちが今から天文学者になるわけもない。それなのに、講義も観望会も楽しく、教えている私の方まで元気になることに気づいた。天文学は、そもそも私たち人類が行くことができない、ほとんど縁のない遠くの世界のことを好奇心だけでやっている「役に立たない仕事」の典型だ。そう考えると天文学はアートの仲間であり、それは人々の心を豊かにす

尾久土正己（釜芸大「天文学」講師）

ガムラン授業を終えて

「表現の講師、岩橋由莉さんに質問しました」

表現の時間に

・表現の授業のなかでいちばんドキッとしたことは何ですか
「表現」の時間は、それぞれが今外に出していいと思っていることを出し合う場だと思っていますが、お話を聴いていると、時々私の奥底にあるものに触れたりすることがあって、それを感じた時にドキッとしてました。それから、その時々で気になっている人が居て、その人が来ていればドキッとしていました。

・授業で印象的だった回とそのときのことを教えてください
二つあります。第一回目の時に釜ヶ崎に初めて来たというTさん(女性)が皆の話を聴いてポロポロ泣いてびっくりしました。が、1期、2期の期間中に来た女性たちも数人、やっぱりおじさんたちの話を聴いてポロポロ泣いていました。おじさんたちが自分の話をしていることに、とにかく心が動くのだそうです。一方、私は涙もろいくせに、自分の表現のクラスで泣いたことはありません。とにかく、私は必死で聴いているのだな、とつくづく思いました。
また、風邪をひいてポーっとしてしまった回で、「先生元気ないから俺がいったるわ!」といつも以上にみなさんががんばって発言してくれて、そして進行がスムーズだったこと。

・表現の時間の記録し辛さについて、どのように考えられますか
この時間は、集まってきた人々によってやることの変化するので、何をやったかという事ではなく、そこに集った人々が2時間をどう過ごしたかを味わうもののように思います。

毎回集った顔ぶれを見ながら、互いにどんな状態なのかを話しながら、聴きながら、探りながら、人が集まって自分の居所を形成していくプロセス(課程)のシーン(場面)を見せてもらっていました。

よく言っていたことですが、表現の時間は演劇ととても似ていると思います。そのシーンの台本に必要なのは、語られたことの一言一句の精密さと、ノンバーバル(非言語)のやりとり、そして、場全体を大きく把握する力と、参加者一人一人に起こっている感情やちょっとした動きに注目できる繊細な力だと思っています。このシーンをしっかり見るには、映画監督、演出家と同じような目線や集中力が必要だなと思っています。

記録するのはとても難しいと思います。でも、いまちょっと思いついたのですが、誰か一人だけに焦点を当てて追い続けるのも面白いかもしれないですね。

・釜ヶ崎芸術大学の授業として場が開かれることのおもしろさはどこにあると思いますか
初めてきた人の多くが、ここは、怖い場所というイメージを持っていた、と感想を言われていました。なかなか一般の人々が来れないと言われるその場所で、来た人が同じように机を並べて勉強したり、表現し合ったりする場を持つことはとてもおもしろかったです。

・釜ヶ崎だからこそできること、おもしろいことはあると思いますか
参加する人が属していた、または属しているものには一切関係なく、表現できる場を持つこと。

・ゆりさんがこの授業で何よりも大事にしたいと考えられていたことは何ですか
「表現」で集ってくれた人それぞれが、思うように存在できる場づくりです。

・場をもつことについて改めて持たれた課題はありますか
表現の時間の印象として、みなさん自分が消えていくことを前提に話されている気がしていました。生きていることよりも、消えていく存在として実感しておられるというか…うまく言葉にできないのですが。それを感じる時間がかけがえなくて、惜しくて、このままこの時間が続かないかなと思ったり、続かないからこそこの時間なんだと思直したり。そしてそこには少し哀しい感情もついていた。

場を持っている間は「聴く」ことが前面に出ているのですが、終了後は自分自身の中にあるこういった矛盾や無常観のようなものを毎回のように味わっていました。

それらを一人で収めきれない、抱えきれない時もあり、そんな時には、信頼できる人に話を聴いてもらっていました。が、一人で思うのではなく、その場に居た者と共有するのもありなのかもしれないなと思っています。毎回場を持った後に、「今日の場の味わい」として10分くらい振り返る時間があったもいいのかしら? それともそれらは見守っていたスタッフとすることなのだろうか?とにかく、「表現」の時間で何を味わったのかを毎回言語化してみたいな、そんなことを思っています。

今滝憲雄(釜芸大・学籍番号30番)

自己表現の喜び

「親密かつ公共的な場で」

釜芸の特質とスタッフの営為
私は現在、40歳代半ばを迎えつつある大学非常勤講師です。担当コマ数が非常に少なく相対的貧困の状態から脱せず、親元での居候生活を送っています。また2012年12月に自宅で母を看取り、その喪失感を埋めるがごとく昨年8月まではある民間教育研究団体の全国大会の成功に向け、実行委員会事務局の任に尽力してきました。

走り続けてきたその仕事が一応一段落し、人間関係も絡んだ心身の疲れが始めようとしていた頃、釜芸に参加することになりました。大学で担当する人権教育関連の授業でフィールドワークを企画するために、釜ヶ崎を訪れた際、たまたまコカールームのスタッフさんたちと出会ったことがきっかけです。ちなみに受講したのは音楽、天文学、表現、お笑い、感情、狂言、絵画、詩、合唱、ダンス、写真と時間的余裕をフルに活用して、思う存分、授業の楽しさを満喫しました。厚かましいこと極まりないですが、釜芸の原則である参加費無料で出入り自由、その日限りの飛び込みも許される「気前の良さ」に助けられ、2回に1回のペースで顔を出し続けました(精勤賞と景品も頂きました)。制度の問題は毎年クリアしなければならぬ壁のようですが、無償で授業を受けられる点は魅力であること間違いなく、今後もその維持と財政的な負担の軽減、事務局体制の強化がなされますよう祈っています。また西成区内に設けられた8つの会場も、堺の自宅から30分程で通える距離で、自身にとっては場所の利便性も出席率の高さを後押しした要因でした。

そして何よりも講師の先生方の魅力あふれる人柄と広く深い専門性(自身が評価するのもおこがましいですが)。授業構想の共同作業者と見受けられ常に笑顔で受講者を出迎え、陰で支えておられたスタッフの方々の姿勢(準備し参加し記録し発信する努力)。その内に秘めた情熱が釜芸に足を運ばせる原動力・誘因力として働いていたと感じています。

そんな癒しと刺激に満ちた場でもあった釜芸が芸術の世界にどんなインパクトを与えどんな影響を及ぼしていくのか、まったくの素人で門外漢の自身には想像もつきませんが、以下、自己にとっての釜芸の意義にのみ若干触れさせていただきます。

人間存在そのものの芸術性

私は元来、他者に向かって何かを表出する行為が苦手な存在でした。おそらく原因は表出に至るプロセス、ペースがスローであることに加え、表象されたも

のに対する自信の無さが挙げられるだろうと思っていました。が、今回の釜芸への参加を通して、私には、表現観の希薄さから来る他者像の欠如の問題があることに気づきました。表現することは「自分の中の他者を動かすこと」とはコカールーム代表の上田假奈代さんの言葉ですが、自己の中の他者(絶対他者も含む)に多大な関心を持ち続けてきたつもりでいながら、実はそのような自己内対話を軽視し、途中で諦めてきたこと。そこには具体的な他者(の他者性)との交わりの問題(裏を返せば自己充足性の問題)があることを改めて思い知らされたのでした。

そんな薄っぺらい僕に、表現とは他者の語りに真摯に耳を傾けること一すなわち沈黙も立派な表現活動一であり、他者の表現を聴従する行為が他者の表出行為を成り立たしめる一要素である、と気づかせてくれたのも釜芸でした。もちろん以前からそのような考えに触れてはいました。ですが、それが具現化された場所、一すなわちあるがままの存在が丸ごと肯定されるだけでなく、何もしないことをする行為(一見何もしていないこと)が、その場の形成要素として、場所の力の構成要素として積極的に受容され、あるべき当為として評価されていることを実感できる場所一には、なかなか出合ってきませんでした。

そしてこのような前提(学び手たち個々の絶対的な尊厳)が釜芸では共有されていたからでしょうか。受講してきた釜芸の授業すべてが、人間存在そのものの芸術性(自己表現性)に依拠しているかのごとく、無理なく自然なかたちで個性(芸術的才能)を開花させるものであったように感じています。そしてここには、人間の自然と地続きのものとして芸術活動を展開させることに対する安心感と心地よさ、それに由来するであろう自由と喜び、笑顔があふれていました。時代は今、そのような創造の場所を求めていると言えるのではないのでしょうか。居場所であり、他者に必要とされ認められることを実感できる親密かつ公共的な場所を。そこで生まれているもの、制作されたものの芸術的価値には言及できませんし、個々の授業の評価もいまだ言葉にできていませんが、釜芸の存在意義については以上の点より確信を抱いていることを強調したいです。

春からは第二期の自主ゼミや独立(自主運営)の授業、部活動も継続して開かれるようです。自己の器(自己の中の他者)を広げて行く貴重な場にこれからも邪魔したいですし、「これまでの自分の考えの枠を揺さぶるような出会い、世界のゆたかさを知るような体験」(釜ヶ崎芸術大学2012 REPORT一頁)を自覚的に期待し、これからはもっともっと大事にしていきたいです。

学ぼう という姿勢

「釜ヶ崎」という言葉を口にするのが多くなって二年ほどになる。コクルームとのご縁ができて、釜ヶ崎を訪れる機会が増えたからである。ずっと気になっていた釜ヶ崎であったが、そこで実際に自分が何かをするとは思えずにいた。コクルームが「釜ヶ崎芸術大学」というとても魅力的な計画を始めたとき、哲学の講師を打診されて、正直なところ自信はなかった。が、西成市民館で「哲学の会」をして、参加者から確かな手応えを感じていたから、思い切って引き受けることにした。これが、ぼくと釜ヶ崎芸術大学との関係の始まりである。

ぼくは大学の教員になって、今年で10年目になる。それまでは看護師として働いていた。ぼくと学校との関係はややこしい。高校を一度は中退して別の高校に入り直し、大学の夜間部で哲学を学んだが、生活に追われて挫折する。40歳を超えてから大学にもぐり（非正規の聴講）をするようになり、いろんなことがあって、社会人として大学院に進学する。離れ業のような進学だった。けっして学業が優れていたわけではない。ただ、学びたいという気持ちだけは強かった。それを理解し、支えてくれる人たちによって、ぼくにチャンスが与えられた。つくづく、自分は幸運だったと思う。

学ぶこと、語り合うこと、表現すること、人と出会い自分を変えていくこと

が、人生では抜きにできない。人は生存以上のことを求めてしまう。この願いを叶えてくれるのが学校でなければならないという訳ではない。試験をして門前払いをする学校には、あらかじめ人を評価する冷たさがつきまとう。釜ヶ崎芸術大学の良いところは、入学試験も落第もないところだ。学びたいという気持ちだけが大切にされる。学ぼうとする姿勢が何よりも難しい。試験に受かって自分の能力を誇示し、授業料を払って対価としての知識を要求するのでは、学ぶという姿勢は生まれてこない。成績や学歴という頼りないもののために、自分の人生を手段にしているかに見える若者たちを見ると気の毒になってしまう。生きることと学ぶことが、目的手段としてばらばらにならないような学びの場を、もっと広げていく必要があるだろう。

釜ヶ崎芸術大学に関わって、受講生のみなさんの熱い視線を受けながら、借り物でない自分のことばで議論を挑んでくる真剣さに、幾度も身が震える思いがした。哲学の講義で、一番の刺激を受けたのは講師のぼく自身だった。

おっちゃんたち マズいもじめな

由良栄久
(釜芸大・
学籍番号 17 番)

釜ヶ崎芸術大学ではいろんな人がいろんな所から釜ヶ崎に集まってくる。ただの興味本位で見にくる人や、ひまつぶしで来ている人もいる。講義を受けても役にたたないものがほとんどだと思ふ。学生証にハンコをもらうだけで楽しんでいる人もいる。人それぞれ違いがある。学生たちが言いたい事を30分もしゃべるので途中でこれはおもしろくないと帰っていく人もいた。自分の人生はこんなに辛いものだと思ふ人に聞いてほしいのだと思うのだが、話がおもしろくないのはやめてほしいと感じる。しかし最後まで講義を聞く。これは、この時間を共有している人々は、何かを求めて自分に何かを感じたいのである。その何かは自分にしかわからないのである。

いろんな講義を積み重ねることによって、自分というものは、今感じているものに対して何を考えているのかをことばとして表現することが出来る。言いそびれた言葉を探し求める。これは学習力がついたとも言える。これも人それぞれ違う。

講義会場を出るとほとんど忘れてしまう。内容についてはわからない。それは歳のせいであるかもしれない。でも講義で初めて知ったことばは出来るだけ自分のノートに書き残すことにしている。新しい発見を求めているからだ。この講義に期待している部分が少しはあるかもしれない。この講義で出会った人々には何も求めていない。それよりは自分の中にある何かを発見したい。自分に出来る可能性を広げたい。それを希望として持っている。

これからいざ本番だ。会場に人が集まり舞台を見つめる人たちが待っている。舞台上の出演する人たちの目の色が変わっていく。キラキラと輝いている。今から成果発表会。今まで学習してきたものを人に見てもらおう緊張感で心はドキドキだ。

人前で音を出す、人前で歌を合唱する、人前でダンスする、人前で声を出す。ひさしぶりに興奮する。失敗する。うまく行くかどうかはわからない。一番大事な所で失敗した。おれの生きざまと同じだと思つた。しかし悔いはない。全力をつくしたからだ。今まで自分を表に出すことがにがてな人間が、舞台上の上に立つ。すばらしい時間をすごすことができた。これは一人の力では出来ない。みんなの力を合わせた結果が成果としてあらわれたものである。自分の心に残る瞬間を感じることができて、自分作りに役に立てる部分を大切にできれば…、そして残り少ない人生をたのしく生きていけるのが夢である。

最後に言いたい。講義が終った時に「ありがとうございました」と言う言葉が出る。この言葉は自然に出て来る。やはり感謝という気持ちがこの言葉に表現されている。でも本当は、もっと違った形にして自分たちの心を講師の先生たちに伝えたい。はっきりとした形にして表現することを参加者たちが考えなければ、この大学の意味というものが消えていくのではないか。今、行動に移すことをわすれないうで、形に残さなければ、わすれられていく運命であると思ふ。

釜芸をめぐる 人生の編み目

釜ヶ崎芸術大学(以下、釜芸)のおもしろさは講座の時間の外にはみだしていく。参加者の身上のすべてを追うことはできない。けれど釜芸をめぐる人生模様の一部をここに残しておきたい。

Aさん
一年目の釜芸に施設から足しげく通い、クラスの安心感を担ってくれていた。たまたま心身が安定されていた時期だったと後にわかる。アルコール障がいの治療中であり、酔っぱらってコクルームに来たときのアマリの豹変ぶりに驚く。その後治療のために入院、二年目には数回だけ顔を見せた。次期はぜひ。

Bさん
一年目の釜芸終了後もコクルームのバザーを手伝ったり、他の企画に参加し就労への意欲も高まり仕事が決まる。しかし二年目がはじまる直前、街から姿を消した。釜芸の仲間が気にかけて部屋まで行ったがもぬけの殻。二年目が終わったころ、別の街で元気に暮らしていることを報告に来てくれた。

Cさん
一年目の釜芸のちらしを見て、はじまる前から何度もコクルームに足を運び詳細を確認する熱心さ。一年目も二年目も、会期の初盤は元気だが、途中から精神の調子が悪くなり入院する。病院から何度も電話があり「病院で釜芸をしてもいいか」と聞かれ「どうぞ」と言ったが、その後どうされているかわからない。

Dさん
一昨年から相談所と勘違いしてコクルームカフェに来るように。ご自身のトラウマを何度も何度も話し、よく死にたいと言う。一年目は釜芸に誘っても無関心、二年目は「できるだけすべて参加する。何も得られなかったら自殺する」。狂言にも参加表明したが、12月に入り急に釜芸もカフェにも姿を見せなくなった。大晦日の日にスタッフが(もしものために)僧侶を連れてアパートを訪ねる。そっけなく生存を確認。その後、狂言の舞台でみんなを大笑いさせてくれた。

Eさん
この秋、ふらっと閉店後のコクルームに。お店にあった釜芸の看板にふと目をとめ「おーこりゃええな」と、ちらしにある谷川俊太郎さんの釜芸の詩を朗読する。「アル中でも字が書けんでもいいか」「もちろん」と答えると「挑戦するで」と大切にちらしを持ち帰られた。一度だけ授業に参加。耳が遠く聞こえなかったようで、その後は来ていない。今は道端で挨拶を交わし釜芸のことをとても気にかけてくれる。

Fさん
コクルームに月に何度かお酒を飲みに来る。いつもかなり酔っぱらい。ある時釜芸の哲学の授業に誘ってみた。赤ら顔での参加だったが、一生懸命話を聴き、話をした。その後も何度もその話をされる。「あんなふうに分かる言いたいこと、みんなの前で言ったのはじめてだったから」。こないだふと誘ったら「孤独のアートマネジメント」という企画にも参加してくれた。

釜芸は人生を編む。生活へ、関係へ。死生観へ。何かのためでない学びだからこそ。

上田假奈代・植田裕子

「芸術の良心、未知の芸術 —ヨコハマトリエンナーレ2014と アーティスト像」

森村泰昌 (ヨコハマトリエンナーレ2014 アーティストティック・ディレクター)
【聞き手：福住廉 (美術評論家)】

芸術の内側への参加

福住——「ヨコハマトリエンナーレ2014」の参加アーティストに、大阪・西成区の釜ヶ崎芸術大学が入っていたのに驚きました。「芸術大学」という名前ではありますが、いわゆるアートとして絵を描いたり映像をつくるのではなく、社会的なアクティビティとしてのNPOですね。最近オープンした「アーツ前橋」(*1)もそうでしたが、そういった従来の考え方ではアートとされなかったことを含めて展覧会をつくるという姿勢が見えました。

森村——ずっと芸術とは何か考え続けてきたんですが、立派な作品をつくる以前に、もっと大切なものがあるのではないかと思うことがあります。表現しなければいたたまれない切実感は、良い作品が生まれる以前に持っているべき大事な部分です。それを感じさせてくれる場がどこにあるかと眺めてみたとき、たとえば釜ヶ崎芸術大学の活動の中にあるのかもしれないと思いました。西成のおっちゃんたちは習字をやっていたり、詩をつくっています。それらをちゃんと展示し、表現として成り立っているということを見せたいとも考えていますが、同時に何かそれ以外に重要なことが浮かび上がって来ないだろうか。

彼らがいわゆる芸術の「表現」に目覚め、彼ら自身の体験を含み込んだしかるべきものが生まれてくることに期待するのかがどうかなど、具体的なことはまだわかりません。最終的にどんなものが出てくるのかが問題ではなくて、彼らが何かをやり出す時の場自体に表現の大事な根幹があるような気がす

るんです。それを、芸術家たちは意外と忘れてしまっている。釜ヶ崎芸術大学を美術館に呼び込むことには意味があるに違いないという直感がありますね。

福住——おっちゃんたちも呼ぶんですか。

森村——まだわかりません。釜ヶ崎芸術大学は、いろんな人が講師として行って地元の人が学ぶというもので、今はおっちゃんたちは聞いている立場なんです。今度は彼ら自身が先生になり、語れるようにしていきたいと、釜ヶ崎芸術大学のオーガナイザーとかは考えています。釜ヶ崎はまさに忘却の街で、いろいろなことを忘れ去ろうとして来た人たちが、自分たちで語ることをしてない限り、次の段階には行けないだろうと。だったら「釜ヶ崎芸術大学 in 横浜」として、釜ヶ崎のおっちゃんたちが講師になって、お客さんがそれを聞くという関係もあり得るかもしれません。ただ、見世物ではないのだから、釜ヶ崎の人たちにとってどれだけ意味があるのかという問題もあります。

たとえば、「Coffee TAKIDASHI (カフェ炊き出し)」をやるというアイデアも考えているんですよ。釜ヶ崎には「勝利号」というバスがあるんです。初代はかなり過激で、飯場闘争の時に運動家たちが乗り付けていったものですが、今は3代目で、おっちゃんたちの遠足に使っているんですね。その勝利号を会場に乗り付けて、「Coffee TAKIDASHI」というオープンカフェしよか、とかね(笑)

*1 アーツ前橋 「表現をすること、お互いを理解することはすべての人にとって大切なものと考え」芸術文化活動の支援や振興を担う群馬県の施設。 artsmaebashi.jp (編集部注)

ヨコハマトリエンナーレ2014へ

釜ヶ崎芸術大学への道

上田假奈代

● ジャストタイミング

釜ヶ崎芸術大学(以下釜芸)という名前は人々の思いを引き寄せるようだ。誰でも参加できる地域の会合の場で、「このまちにいま、必要なのは釜ヶ崎芸術大学みたいなもんなんや」と発言されているのを聞いた。釜芸に参加したことのない元日雇い労働者と思われる方の発言。これまでの釜ヶ崎では労働、福祉、住居、医療などといった課題が大きかったが、この数年、生活保護受給者が増え、彼らの孤立やアディクションにたいして「居場所」や「つながりづくり」といったことがよく聞かれるようになっていく。そうした変化のなかで釜芸はジャストなタイミングで開かれたのだと思う。

● アート? コミュニティアート?

本稿は釜芸をアートの文脈から考察したい。昨年の報告書(*1)をご覧ください。ただくと、筆者の視点は地域のことや現場の揺らぎについて詳しく書いているが、アートに重きをおいて記述してこなかった。評論家ではないからという理由と、机上のことばと現実との乖離に身のおきどころがなくて、というふたつの理由になる。わたしたちの活動がアートの文脈のなかに位置づけられるときはコミュニティアートや社会包摂型アートとされる。しかしどうもじっくりこない。むしろ、社会彫刻(*2)に近いと感じているが、そうした視点からの読み解きをされることは少ない。

では、この機会に日本や大阪におけるコミュニティアートやアートプロジェクトの動きをさっと振り返ってみよう。1995年阪神淡路大震災をきっかけに、98年NPO法が成立し、アートNPOが生まれる。「まちおこし」が流行る。2000年以降、少子高齢化、不況、首都圏一極集中のなかでコミュニティの崩壊が言われる。また美術館やギャラリーなど既存の発表場所を飛び出すアーティストたちがいて、地域アートプロジェクトが起こる。2001年に制定された文化芸術振興基本法では、文化芸術は「心豊かな活力ある社会の形成にとって極めて重要な意義」をもつとされ、「これまで培われてきた伝統的な文化芸術を継承し、発展させるとともに、独創性のある新たな文化芸術の創造を促進することが緊要な課題」と言う。このように文化政策において

も文化芸術を社会化させる方向が示されている。2011年東日本大震災。絆とかコミュニティとか「アートに何ができるのか」という問いが発せられる。(大事がないと自問できないのかと恥ずかしいですね。)

● 大阪の文化政策の落とし子

釜芸を運営するコクルームは2003年大阪市の文化事業の施策から生まれた経緯がある。そして大阪市の文化政策のビジョンのなさから事業が頓挫してしまいが、コクルームは活動を継続する。2007年から文化政策と芸術をめぐる状況に問題意識を持つ仲間たちと政策に動きかける勉強会をはじめ、アーツカウシンの設立をめざした。その動きとは無関係に2012-13年には東京、大阪でアーツカウンシルが誕生した。アーツカウンシルという名の組織の有り様はさまざま、行政と文化芸術の関係の模索がうかがえる。現在も勉強会は継続している。

コクルームは誕生から文化政策に翻弄されてきたことから公共性とは何かを考え、アートと社会の関わりという問いに、自らの存在の問いも混ぜこんで活動してきた。わたしたちがとらえた公共性とは「民主主義のために当たり前に必要なところがまえ」を練習することだった。

● アートの領域の拡充、でも、あいかわらず

近年、リレーショナル(関係性)アート、コミュニティアートがあちこちで目につく。障がい者、高齢者、失業者、生活困窮者、在日外国人、性的少数者といった社会的に排除されがちな状況にある人や、生きづらさを抱えた人の社会参加の場を生み出す社会包摂型アート(ソーシャル・インクルージョン)、異なるセクターや縦割り構造の弊害を乗り越え連携を生み出すなど、『新しい公共』の担い手としてのアートも注目されている。AIR(アーティストインレジデンス)も盛んになる。地域の振興にはアートが有効とみる創造都市論もある。まだ日本では議論になっていないが、社会介入(ソーシャル・インターベンション)としてのアートもある。

それでも、あいかわらずアーティストを職業とするなら市場のなかで成功しなくてはならず、地域のアートプロジェクトは発表の場として活用されるよう

になっている。地域側からするとアーティストに利用されたととらえる向きもあると聞く。とはいえ地域も地域だけに、アーティストも業界に閉じるだけでなく、いろんな人々に出会う経験は互いにかけてあげないものであると思うし、さまざまな領域とアートがまじりあい対話を重ねることが大事だと思う。一方、アートマネージャーという職業についても、人材育成の機会が増え認知は高まっているが、働く場が少ないという問題がある。大阪のこの10年は辛いものだった。ともに働きたい人たちが大阪から多く流れ出た。マネージャーの仕事は期限付き。キャリアを重ねられず年度末に難民化する。コッルームの場合はスタッフがアーティストであることも多かったが、マネジメントに徹する企画も多く、その両方の問題意識を混在させてきた。

● 釜ヶ崎芸術大学とアート

こうして振りかえると、コッルームはアートや文化政策の文脈のなかで数歩ずれていばらの道をヨタヨタと転がってきたようにみえる。釜芸の特徴のひとつはコッルームというアートNPOが運営していることだろう。それゆえ釜芸は地域と地つづきにあり、地域の特徴をとらえた独創性のある新たな文化芸術といえるだろう。ただ、釜芸ではいわゆるアーティストの作品が生まれるわけではない。講師やレジデンスに来るアーティストの名が連呼されることもない。ここでの経験をどう昇華していくかは、アーティスト本人が考えることになる。またアート業界の特定のジャンルを振興しようという企図もない。釜芸では地域のなかで暮らす高齢者やこどもたち、さらに支援側にいると思っている人々が、講師としてやってきたアーティストや専門家とまざりあい、教える／教えられる、支援する／支援される関係を越えて、安心感が生まれ新しい考え方が発語や態度となる。ここでの創造性は、美術館に収まるものではないが、視線を遠くまでのばせば、文化芸術の裾野を広げ分厚くし、アーティストを刺激しているかもしれない。とすれば多にアートを振興しているとも考えられよう。釜芸は、人が立ち上がり声をだす瞬間、人間存在の根源的な表現のちからを呼び起こすことが確認できるアートの原始的な場といえるのではないか。

● どこにも位置づかないダイナミズム

コッルームはその体制がつねに不安定なのがおもしろい。福祉や文化の制

度にのらず、作品にもならず、アートにもなかなか位置づかない。最近発行された本のなかの座談会に次のようなくだりがある。「雨森―「コッルーム」の存在自体が假奈代さんの作品だと言った方がわかりやすいかもしれませんね。森―他人の人生に切り込んでいく深さの限界がそこにあって、アーティストじゃない人がその領域まで行ってしまうと組織として機能しなくなると思うんです。寸止めで止まるというのも見識であり、プロジェクトであることを逆に担保している気がします。」(※3)

ここでは、作家の作品としてのコッルームという見方によって、活動を位置づかせている。確かにわたしにとってコッルームも詩だ。しかしコッルームを作品として固定することはコッルームが死することでもある。とらえどころのない活動のダイナミズムを作家の作品やプロジェクトとして回収しなければならぬアート文脈の限界を感じるのはこういうときだ。

● 釜ヶ崎芸術大学、ヨコハマトリエンナーレ 2014 に

そして、釜芸はヨコハマトリエンナーレ 2014 に参加が決まった。釜芸の講師である美術家の森村泰昌さんがアーティストディレクターだ。森村さんのインタビューの(60頁参照)「表現しなければいたたまれない切実感」の釜芸として横浜に立つ。齟齬や孤独や誤解や挫折の人生を背負い、見世物乗り越え、混沌を抱きかかえた無表情でとつとつと語り、笑いと問いととともに飄々と去っていくことになるのだと思う。

現在は準備と資金集めに追われていてピンチだと感じることが多い。ところがこれを機会に、なのか、おじさんたちは文章や絵、あるいは発言やその態度に、とてつもないパッションを見せる瞬間が増えた。ピンチはチャンス！しぶとくクリエイティビティを発揮するのが、人生とアートの真骨頂だ。

*1 「釜ヶ崎芸術大学 2012 REPORT」編集・発行：NPO法人コッルーム 2013 30～31頁

*2 社会彫刻 ヨーゼフ・ボイス 1921年―1986年 ドイツ第二次世界大戦で従軍したのち芸術アカデミーで学び、フルクサスに関わり、パフォーマンスアートやインスタレーションなど行なう。彫刻や芸術の概念を教育や社会変革にまで拡張した社会彫刻という概念を生み出す。自由国際大学開設、緑の党結党などに関与し、議論を呼ぶ。「人間は誰でも芸術家であり、自分自身の自由さから、「未来の社会秩序」という「総合芸術作品」内における他者とのさまざまな位置を規定するのを学ぶのである」という言葉は、20世紀後半以降のさまざまな芸術に非常に重要な影響を残している。

*3 「アートプロジェクト 芸術と共創する社会」 熊倉純子【監修】2014 発行：水曜社 248頁

開催概要

- 期間：2013年9月6日(金)～2014年3月29日(土)
- 対象：どなたも
- 参加費：無料・カンパ歓迎
- 会場：[釜ヶ崎支援機構お仕事支援部]…大阪市西成区萩之茶屋3-6-12 / [カマン!メディアセンター]…大阪市西成区太子1-11-6 [喜望の家]…大阪市西成区萩之茶屋2-8-18 / [禁酒の館]…大阪市西成区萩之茶屋3丁目1-8 / [山王集会所]…大阪市西成区山王2丁目10-24 [太子会館老人憩の家]…大阪市西成区山王1-8-12 / [西成市民館]…大阪市西成区萩之茶屋2-8-18 [西成プラザ]…大阪市西成区太子1-4-3 太子中央ビル(100円ショップ)3階

2013年	科目名/講師名	会場	参加者数
9月6日(金)夜6時～8時	【表現】講師：岩橋由莉	@西成プラザ	21名
9月7日(土)昼2時～4時	【音楽】講師：野村誠	@西成市民館	30名
9月9日(月)昼2時～4時	【詩】講師：上田假奈代	@太子会館老人憩の家	24名
9月20日(金)夜2時～8時	【天文学】講師：尾久土正己	@西成市民館十三角公園	19名
9月21日(土)昼2時～4時	【書道】講師：畑中弄石	@西成プラザ	12名
9月27日(金)夜6時～8時	【表現】講師：岩橋由莉	@西成市民館	16名
9月28日(土)昼2時～4時	【感情】講師：水野阿修羅	@太子会館老人憩の家	10名
9月30日(月)昼2時～4時	【ガムラン】講師：中川真	@太子会館老人憩の家	19名
10月4日(金)夜6時～8時	【哲学】講師：西川勝	@西成市民館	20名
10月5日(土)昼2時～4時	【詩】講師：上田假奈代	@西成市民館	17名
10月7日(月)昼2時～4時	【お笑い】講師：大瀧哲雄	@喜望の家	15名
10月11日(金)夜2時～4時	【表現】講師：岩橋由莉	@西成プラザ	11名
10月12日(土)昼2時～4時	【音楽】講師：野村誠	@西成市民館	15名
10月13日(日)朝10時～12時	【絵画】講師：本宮水	@カマン!メディアセンター	18名
10月19日(土)昼2時～4時	【哲学】講師：西川勝	@西成市民館	23名
10月21日(月)昼2時～4時	【お笑い】講師：大瀧哲雄	@喜望の家	11名
10月25日(金)夜6時～8時	【表現】講師：岩橋由莉	@西成プラザ	11名
10月28日(月)昼2時～4時	【感情】講師：水野阿修羅	@喜望の家	12名
10月31日(木)昼2時～4時	【狂言】講師：茂山童司	@太子会館老人憩の家	16名
12月1日(日)朝10時～12時	【絵画】講師：本宮水	@カマン!メディアセンター	15名
12月2日(月)昼2時～4時	【お笑い】講師：大瀧哲雄	@喜望の家	7名
12月7日(土)昼2時～4時	【音楽】講師：野村誠	@太子会館老人憩の家	13名
12月9日(月)昼2時～4時	【詩】講師：上田假奈代	@太子会館老人憩の家	20名
12月11日(水)夜6時半～8時半	【合唱部】講師：山本則幸	@禁酒の館	10名
12月13日(金)夜6時～8時	【表現】講師：岩橋由莉	@西成市民館	12名
12月14日(土)昼2時～4時	【狂言】講師：茂山童司	@太子会館老人憩の家	12名
12月16日(月)昼2時～4時	【ダンス部】講師：中西ちさと	@喜望の家	10名
12月21日(土)昼2時～4時	【感情】講師：水野阿修羅	@西成市民館	12名
12月23日(月)昼2時～4時	【ダンス部】講師：中西ちさと	@太子会館老人憩の家	9名
12月25日(水)夜6時半～8時半	【合唱部】講師：山本則幸	@禁酒の館	10名
12月27日(金)夜6時～8時	【表現】講師：岩橋由莉	@西成市民館	22名
12月28日(土)夜6時～8時	【天文学】講師：尾久土正己	@西成市民館十三角公園	17名
12月30日(月)昼2時～4時	【写真】臨時講師：上田假奈代	@釜ヶ崎支援機構お仕事支援部	19名

2014年	科目名/講師名	会場	参加者数
1月3日(金)昼2時～4時	【写真】講師：若原瑞昌	@釜ヶ崎支援機構お仕事支援部	14名
1月4日(土)昼2時～4時	【写真】講師：若原瑞昌	@釜ヶ崎支援機構お仕事支援部	10名
1月5日(日)昼2時～4時	【写真】講師：若原瑞昌	@釜ヶ崎支援機構お仕事支援部	12名
1月6日(月)昼2時～4時	【ダンス部】講師：中西ちさと	@喜望の家	11名
1月8日(水)夜6時半～8時半	【合唱部】講師：山本則幸	@太子会館老人憩の家	16名
1月10日(金)夜6時～8時	【表現】講師：岩橋由莉	@西成市民館	14名
1月11日(土)昼2時～4時	【ガムラン】講師：中川真	@太子会館老人憩の家	8名
1月13日(月)夜2時～4時	【ダンス部】講師：中西ちさと	@太子会館老人憩の家	11名
1月13日(月)夕5時～7時	【狂言】講師：茂山童司	@太子会館老人憩の家	11名
1月14日(火)昼11時～5時	【狂言】講師：茂山童司	@太子会館老人憩の家	8名
1月15日(水)昼11時～5時	【狂言】講師：茂山童司	@太子会館老人憩の家	8名
1月16日(木)昼11時～5時	【狂言】講師：茂山童司	@太子会館老人憩の家	8名
1月17日(金)昼11時～夜9時	【狂言】講師：茂山童司	@太子会館老人憩の家+大阪九車会館	70名
1月18日(土)昼2時～4時	【音楽】講師：野村誠	@太子会館老人憩の家	12名
1月20日(月)昼2時～4時	【ダンス部】講師：中西ちさと	@喜望の家	11名
1月22日(水)夜6時半～8時半	【合唱部】講師：山本則幸	@禁酒の館	14名
1月24日(金)夜6時～8時	【表現】講師：岩橋由莉	@西成市民館	21名
1月25日(土)昼2時～4時	【芸術】講師：森村泰昌 特別ゲスト：高山明	@西成市民館	42名
1月27日(月)昼2時～4時	【ダンス部】講師：中西ちさと	@喜望の家	11名
1月31日(金)夜6時～8時	【地理】講師：水内俊雄	@太子会館老人憩の家	16名
2月1日(土)昼2時～4時	【詩】講師：上田假奈代	@西成市民館	19名
2月3日(月)昼2時～4時	【ダンス部】講師：中西ちさと	@喜望の家	11名
2月10日(月)昼2時～5時	【地理】講師：水内俊雄	@カマン!メディアセンター集合	13名
2月12日(水)夜6時半～8時半	【合唱部】講師：山本則幸	@禁酒の館	12名
2月16日(日)昼2時～	【成果発表会】講師：尾久土正己 中西ちさと・野村誠・山本則幸 上田假奈代 飛び入り：砂連尾理	@山王集会所	72名
2月26日(水)夜6時半～8時半	【合唱部】講師：山本則幸	@禁酒の館	17名
3月1日(土)昼2時～4時	【詩】講師：上田假奈代	@西成市民館	10名
3月12日(水)夜6時半～8時半	【合唱部】講師：山本則幸	@禁酒の館	12名
3月26日(水)夜6時半～8時半	【合唱部】講師：山本則幸	@禁酒の館	12名
3月29日(土)昼2時～4時	【詩】講師：上田假奈代	@西成市民館	12名

合計 1114名

岩橋由莉 (いわはし ゆり) 【表現教育実践家】

乳幼児から高齢者までを対象に、その時の場と人の間に生まれるものを感じて表現していく「受信から始まる表現」として独自のプログラム「コミュニケーション・アーツ」を熊野の森から都心のビル街まで日本各地で展開中。 <http://haraiso.com>

上田假奈代 (うえだ かなよ) 【詩人・詩業家】

1969年生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめ。92年から多様な人々にむけて詩のワークショップを行う。「こころのたねとして」など、さまざまなワークショップメソッドを開発する。コカールム代表。

大瀧哲雄 (おおたき てつお) 【お笑いプロデューサー】

有限会社大滝エージェンシー代表取締役。1971年漫才作家の巨匠「秋田實」氏が設立したプロダクションに入社。お笑いタレントのマネジャーを務める。1976年大滝エージェンシー設立。現在まで約5,000組のお笑いタレントをサポートする。

尾久土正己 (おきゅう まさみ) 【天文学者】

岡山県生まれの大阪育ちで、大学時代は昭和町に下宿し、寺田町の大学へ通う。高校教師、2つの山の中の天文台をハシゴして、2003年から和歌山大学教授。宇宙をいかにして文化にするか日々楽しいことを考えている。

茂山童司 (しげやま どうじ) 【狂言師】

父および祖父二世茂山千之丞に師事。1986年、NOHO(能法)劇団の『魔法使いの弟子』、『以呂波』で初舞台を踏む。以後、『千歳』、『三番三』、『釣狐』を抜く。近年ではNHK「プレキン英語」に出演。バイリンガル狂言を行うなど、表現の新境地を開拓している。

高山明 (たかやま あきら) 【演出家】

演劇ユニットPort B主宰。『個室都市』シリーズ、『完全避難マニュアル』、『国民投票プロジェクト』など、既存の演劇の枠組みを超え、現実の都市を使ったプロジェクトを展開している。

中川真 (なかがわ しん) 【音楽学者】

1978年以来、大阪にてガムラン合奏団を設立し、古典音楽のみならず、ガムランの現代作品制作や委嘱を通して、世界のガムランコミュニティとの交流を実施する。<マルガサリ>に所属し、インドネシア芸術大学客員教授を務める。

中西ちさと (なかにし ちさと) 【振付家】

86年大阪府出身・在住。パフォーマンスグループ【ウミ下着】主宰。11年「横浜ダンスコレクションコンペティションII」出場。最近では演劇作品の振付や出演も。日々「誰かのために踊るダンス」について考えている。

西川勝 (にしかわ まさる) 【看護師】

1957年大阪市生まれ。長年、看護師として勤務しながら哲学に関心を持ち続け、40歳を過ぎてから大阪大学臨床哲学で「ケアの哲学」を学ぶ。現在は大阪大学 CSCD 特任教員。

野村誠 (のむら まこと) 【音楽家】

どんな人とも一緒に音楽を作る作曲家。ピアノの可能性を探るピアニスト。動物や風景と合奏する鍵盤ハーモニカ奏者。しょうぎ作曲開発者。NHK教育テレビ「あいので」監修&出演。作曲プロジェクト「原発やめます」進行中。

畑中弄石 (はたなか ろうせき) 【書家】

大阪市に生まれる。昭和40年から約40年間、中学校国語教師のかたわら書道を教える。現在、毎日書道展審査会員。全日本書道連盟評議員。字に上手い、下手はない。自分のところを伝えられる字を書ければ十分。筆の使い方でのろんな字が書けるものです。

水内俊雄 (みずうち としお) 【政治・社会地理学者】

大阪市立大学都市研究プラザ教授。2005年、大阪就労福祉居住問題調査研究会を設立。NPO ホームレス支援全国ネットワーク理事。一般社団法人インクルーシブ・シティネット代表理事。日本ならびに東アジアのホームレス調査を行い、支援施策のためのネットワークづくりをすすめている。

水野阿修羅 (みずの あしゅら) 【メンズサポートルーム大阪世話人】

1998年よりメンズサポートルーム大阪をたちあげ男性が家庭内での暴力(DV)なしで暮らす方法を学び、自分の感情表現の豊かさを回復することを目的に「男の非暴力グループワーク」を実施。著書に「その日ぐらしはパラダイス」。

本宮氷 (もとみや ひょう) 【大阪人】

1967年大阪生まれ。500円持っている人と1億円持っている人で1億の人の方が豊かであるとは限らないように、技術のある人が絵心あるとは限りません。下手でも心にしみる絵がたくさんあります。絵心とはその人が歩んできた道です。お菓子食べながら、楽しく一緒に描きましょう。

森村泰昌 (もりむら やすまさ) 【美術家】

1951年大阪生まれ。自らが有名な絵画や映画の登場人物に扮し写真に撮るというセルフポートレート作品を作り続ける。2013年秋に「侍女達は夜に甦る」(資生堂ギャラリー)、「レンブランドの部屋、再び」(仮題 原美術館)、ウォーホール美術館での回顧展(ピッツバーグ)の3つの個展を同時開催。現在、ヨコハマトリエンナーレ 2014の芸術監督を務める。

山本則幸 (やまもと のりゆき) 【合唱指導】

大学時代より合唱を始める。現在、関西合唱団団長、松原ぞうれっしゃ合唱団、コーラス3びきのくまなど大人と子どもの合唱団、そよかぜコーラスなどの指揮。池辺晋一郎、西村朗、千原英喜、押尾コータローなど委嘱作品の企画にも携わる。

若原瑞昌 (わかほら みずあき) 【写真家】

ブラジル愛好家。藤代冥砂氏に師事。東京、大阪、サンパウロ、ブルックリンを拠点に活動。ポートレート、ファッション、ドキュメンタリー分野の専門。成蹊大学法学部政治学科ゲスト講師を担当。

掲載記事

話題を追う

釜ヶ崎芸術大学は、芸術を通じた日雇い労働者支援に取り組むNPO法人「コカールム」(西成区山王1丁目)が大阪市基金を活用し2012年9月に開設。詩、音楽

日雇い労働者が多く集まる大阪市西成区のおいりん地区で開かれている「釜ヶ崎芸術大学」の活動が2年目の終盤に差し掛かり、学びの場として定着している。受講生は今年8月1日～11月3日に横浜市で開催される現代アート祭典「横浜トリエンナーレ」にアーティストとして参加予定。大学の成果を披露する晴れ舞台に臨む。(岡宏由紀)

横浜の晴れ舞台へ

中西さん(右から2人目)の指導で創作ダンスを練習する参加者。3日、大阪市西成区新今宮を2丁目の喜望の家

ダンス、書道、天文学など、講座には多いと喜ぶ専門家が指導する1回は40人、平均13人が参加約2時間の講座を5カ月するという。担当する同NPOの植田さんは民間基金を使 田裕子さん(28)は「普段い昨年9月に開設。ガム 家族や友達がいなくてもランや狂言などユニーク 多いが、講座を通して友な講座も加え、今年3月 達になり、ずっと来ていまでに14講座を計56回開 人が来なくなると心配



人生投影、たくましさ表現

2月16日に山王集会所 励まされるケースも多で開かれる成果発表会に。植田さんは「地域の向けた作品づくりや練習 人たちの生きる知恵はずが大詰めを迎える中、喜 しい。たくましく生きて望の家(同区秋葉茶屋2 きた経験を知りたくて心 丁目)で3日、今期最後 が動かされる」と説明す のダンス講座が開かれ た。大阪府在住の振付家、 人生を投影させたタイ 中西さんとさんが講師を ナミクな芸術表現や浮 務め10人が参加。朝目覚 沈を生き抜いた人生観 めてから家を出るまで、 の横濱トリエンナーレ した。 のアーティストリック・ デイレクター、森村泰昌 三さん(69)は表現や狂言 さんに認められ受講生の の講座も受講。「勉強に アーティストとしての参 なる。ダンスを始めてき 加が決まった。 ら体調も良く、これをき っかけに人生を成功に導 が、受講生の作品披露の いていきたい」と語る。 他、子ども対象の人生語 長らく病を患っていた りや釜ヶ崎を紹介する写 真展などを計画してい 良栄久さん(59)は多様な 講座を受講。「新しい体 験ができるのが釜ヶ崎大の 止められるか未知の世 界。芸術や表現が人生に 着て本物の能舞台に立つ のかを考えると、場所が 増えるきっかけになれば うれしい」とトリエンナ ーレへの抱負を語った。 同大学は、地域外の人 に学びや気付きを提供す

するようになったがりが生 まれたと振り返る。 若い女性が訪れ釜のお っちゃん」の話を聞いて

釜ヶ崎のまちと会場MAP

